

# 『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』に見る明治期の岐阜県内の水生生物相

金古弘之・千藤克彦

The fauna of fresh and brackish water animals in Gifu Prefecture in the Meiji period based on "Illustrated guide of aquatic animals living in Mino and Hida" published in 1881

Hiroyuki KANEKO, Katsuhiko SENDO

## 1. はじめに

『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』は、明治時代に作られた岐阜県内に棲息する水生生物の解説書である。岐阜県図書館に所蔵されており、この時代の県内の水生生物の生息状況が記録されていて、興味深い資料である(千藤,2007)。さらに江戸時代の『享保元文諸国産物帳』に記載されている生物名(金古,1990b)と現在の方言名(金古,1990a)の間をつなぐ資料としても貴重である。

## 2. 岐阜県図書館所蔵の『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』について

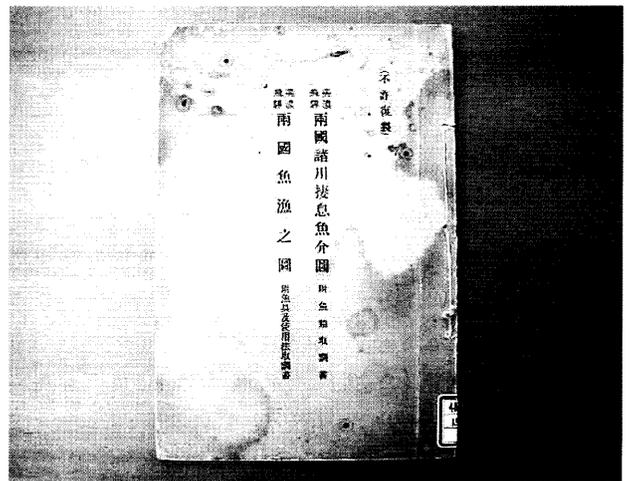
岐阜県図書館が所蔵する、『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』は、1909(明治42)年に岐阜県師範学校の作った写本である。岐阜県が所蔵していた『美濃飛騨両国魚漁之図 附魚具及使用法取調書』・『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』を基に写本が作られたようで、その辺のことは次のように書かれている。

「右ニ図及取調書ノ原本ハ本縣ノ所蔵ニシテ今回本校ニ於テ博物學上ノ参考ニ資スル爲特ニ本縣ヨリ借受ケ之ヲ謄寫セントシタルニ本校生徒ニシテ此ノ圖及取調書ノ印刷ニ付セラレ之カ配布ヲ希望スルモノ多數ナルニツキ其希望ヲ容レ兩圖ヲ撮影シテ寫眞版トナシ取調書ヲ印刷ニ付シテ謄寫ニ代ヘ實費ヲ以テ希望者ニ頒ツコトナセリ  
明治四十二年二月 岐阜県師範学校」

1957年に刊行された『長良川の生物』の中で丹羽は、「岐阜県は、美濃に木曾・長良・揖斐の3大川があり、飛騨に神通・庄の2大川があって、すこぶる河川に富み、またこれらの諸河川はいずれも魚類に恵まれて、その研究は明治14年(1881)の『美濃飛騨両国諸川棲息魚類取

調書』をはじめとして、早くも諸学者の着手するところとなった。」と述べている。しかし、「筆者は遺憾ながら、まだこの取調書の全文を閲読する機会を得ない」とも書いている(丹羽,1957)。氏が目を通されていたなら、研究はもっと深まっていただろう。

総合すると、岐阜県が1881(明治14)年に作った(著者不明)ものを、師範学校が県より借用し、1909(明治42)年に写しを作ったものようだ。原本のなくなった今となっては、この写本も貴重な資料である。(注1)



美濃飛騨両国諸川棲息魚介図  
附魚類取調書 (岐阜県図書館蔵)

## 3. 記載された種の同定について

同定に当たっては、各號の原文を先に載せ、その後解説をつけることにした。原文を尊重して出来るだけ原文に忠実にしたが、余りにひどい略字については読み易い字に直した。なお、種名の呼称については、ルビのあるものはカタカナで、ルビのないものは推定名をひらがなで記した。方言名は主に金古(1990a)に拠った。そのため、採集した市町村名の表記は1990年当時のものである。

(注1) 『美濃飛騨両国諸川棲息魚類取調書』は岐阜県歴史資料館が所蔵していることが判明した。

## 第壹號

鯉（眞鯉ノ變色セシモノニシテ斑、白、藍等ノモノアリ）ハ美濃国恵那郡中ニ於テ多ク育養ス就中付知、明知ノ両村ハ毎戸畜養セサルモノナシ普通ノ白魚ヨリハ頭小ニシテ身圓ク味ヒ甘美ナリ年々他国へ輸送シ巨額ノ収益ヲ得近來恵那郡地方ハ製絲ノ業隆盛ニシテ蛹ヲ得ル多ク爲メニ充分ノ飼養ヲ施スヲ以テ最モ能ク肥大成長ス大ナルモノ三尺ニ過ク

## 第1号 鯉（ひごい）

取調書の中に「眞鯉ノ變色セシモノニシテ・・・」とあり、「普通ノ白魚ヨリハ頭小ニシテ」とある。白魚とは、ニゴイのことであり、ニゴイはコイに良く似ている。分かり易い説明だと思ふ。また、コイの色彩変異であることも認識されていたようだ。当時、恵那地方は製糸業が盛んで、蚕が盛んに飼われ、餌になる蚕の蛹も多くあり、それで鯉の養殖も盛んだったようだ。

## 第貳號

ランチュウ魛ハ美濃国揖斐川筋及西濃地方ノ池沼等ニ棲息スルモノニシテ形チ牛魛ニ似テ色濃ク軀圓ク肥大ニシテ口潤シ大ナルモノニ寸五六分ニ過キス毎年夏季ヨリ秋分ノ頃ニ捕フルモノトス

## 第2号 ランチュウ魛（ランチュウモロコ）

「形チ牛魛ニ似テ色濃ク軀圓ク肥大ニシテ」とある。ランチュウ魛は、金魚のランチュウのようにすづまりでお腹の肥大した形をしているのだろう。形態からカワバタモロコの雌ではないだろうか。カワバタモロコは腹鰭と尻鰭の間の腹面が竜骨のように突出している。雄の方が小形で体形も細いのに対して、雌は大形で体高も高い（川那部・水野,1989）。また、カワバタモロコならば「美濃国揖斐川筋及西濃地方ノ池沼ニ棲息スル」と書かれていることと、カワバタモロコの方言名が主に養老地方に分布する点でも一致する。

## 第參號

櫻鱒（一名赤目柳鱒）ハ美濃国長良川及揖斐川筋ニ棲息スルモノニシテ形魛魚ニ似テ軀ニ斑紋アリ鱗細シ春時櫻花ノ候ニ至レハ紅色ヲ帯ヒ頗ル美麗ナリ故ニ此名アリ其候味最モ甘美ナリ大ナルモノ八九寸ニ及フ秋ヨリ冬季中ハ白黄色ニ變シテ美麗ナラス捕獲ハ春雨ノ餘ヲ最モ多シトス

## 第3号 櫻鱒（さくらハへ） 一名赤目（あかめ）柳鱒

## （やなぎばえ）

「春時櫻花ノ候ニ至レハ紅色ヲ帯ヒ頗ル美麗ナリ」とあり、櫻鱒の語源を説明している。婚姻色の出ているカワヒガイの雄を指している。ただ、一名の「赤目柳鱒」であるが、これは「赤目・柳鱒」と二つの名前を列記したのではと考へた。鱒にも色々の種がいるため、区別する必要から「柳鱒・白鱒・糞鱒・・・等」の名前が生まれたのである。しかし、柳鱒と呼ばれる魚群の中をさらに区別して、赤目という言葉が被せた赤目柳鱒が必要なのだろうか。カワヒガイの方言名の中に「あかめ（和良村・高富町・川島町・笠松町）」と「やなぎばえ（白鳥町）」が残っている。また、「さくらばえ」の名も、西濃・中濃地域に広く分布し残っている。表題の「櫻鱒」も、方言名の中から分布の広いことで選ばれたのであろう。余分のことだが、ヌメリ魚（第39号）の一名として書かれている「ガマハエ油魚」も、「ガマハエ・油魚」の二つの名称であろう。

## 第四號

鱸魚ハ美濃国本巢郡長良川筋ニ棲息巨口細鱗形大口魚（タラ）ニ似テ白質黒章ナリ頭大ニシテ鰭硬ク棘鬣魚（タイ）ノ如シ性錫ヲ好ム釣丸ヲ以テ釣ルヘシ故ニスズキト名ルノ里言アリ該魚ニ河海ノ別アリ河鱸ハ脂多クシテ味ヒ海鱸ニ勝レリ

（註）「釣丸」は錫丸の誤写、「スズキト名ル」も「スズキト名ク」の誤写である。

## 第4号 鱸魚（すずき）

「河海ノ別アリ河鱸ハ脂多クシテ味ヒ海鱸ニ勝レリ」とある。鱸という字からも海から遡上して来るスズキのことだろう。形態解説のほとんどは『本草綱目啓蒙』から引かれたものである。先の「河海ノ別アリ・・・」も、『本草綱目啓蒙』から引かれたものである。丹羽（1957）によると、スズキの遡上上限は関市保戸島から小瀬とある。記載の「本巢郡長良川筋ニ棲息」は、遡上限界よりも下流だろうから、棲息地はあまり変わっていないと言えよう。

## 第五號

将言魛魚ハ美濃国大野郡揖斐川筋ニ棲息スルモノニシテ普通魛魚ト異ナルコトナシ然レトモ肥大ニシテ体丸ク然シテ淡黒ノ斑紋アリ大ナルモノ三四寸ニ過キス味ヒ最モ甘美ナリ毎年春季ヨリ夏季ノ頃多ク捕フルモノトス

## 第5号 将言魛魚（しょうげんもろこ）

「しょうげんもろこ」、「しょうえもろこ」の方言名が、揖斐川町に残っている。「美濃国大野郡揖斐川筋ニ棲息スル」という記載とも合う。カワヒガイのことである。

『揖斐郡志』に、「将監諸子は揖斐川に産す。岡田将監諸子鱒を嗜好し、慶長19年美濃奉行となるや揖斐川に放養すと稱せらる。此魚味美にして揖斐地方にては将監諸子と稱するも、他地方にては名を異にし櫻色を呈すれば櫻鮎と稱す。」とある。第3号の櫻鱒と同じ魚のカワヒガイであることが分かる。

岡田将監については、「関ヶ原合戦には家康に属し、清須城番であった。合戦後の慶長六年（1601）美濃国可児・羽栗二郡の内5000石を給され、居を姫郷下切におき、大久保岩見守長安のもとで美濃国内の幕府領の代官の一人になった。・・・後寛永八年（1631）正月に80石加増され5080石となって揖斐（揖斐川町）へ采地替となりその地に陣屋を置いた。」と『可児市史』にある。代官として治水・農政・民政の全般にわたって力を揮ったようである。

#### 第六號

鮎魚（モロコ）ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ形チムツ魚ニ似テ鱗粗ク体黄褐色ニシテ淡味ナリ大ナルモノ三四寸ニ過ギズ毎年春季ヨリ夏季ノ頃最モ多ク捕フルモノトス

#### 第6号 鮎魚（モロコ）

「ムツ魚ニ似テ鱗粗ク体黄褐色ニシテ」とあるが、鮎魚（もろこ）の名前からしてモロコの仲間だろう。岐阜県には、「もろこ」と方言名で呼ばれているものには、イトモロコ・タモロコ・デメモロコの3種がいる。その中でも、分布も広く、量的にも多いのが、タモロコだろう。「濃飛両国各川流ニ棲息スル」とある。広い分布からタモロコだろうと思われるが、決め手はない。

#### 第七號

柳鮎魚ハ美濃国長良川揖斐川筋ニ棲息スル形チ普通鮎魚ニ異ナルコトナシト雖モ濃青色ニテ鷹羽ノ如キ斑紋アリ淡味ナリ大ナルモノ三四寸ニ過キズ毎年春季ヨリ夏季ノ頃多ク捕フルモノトス

#### 第7号 柳鮎魚（やなぎもろこ）

「鮎魚ニ異ナルコトナシト雖モ濃青色ニテ鷹羽ノ如キ斑紋アリ」とある。このような斑紋を持つモロコの仲間にはスゴモロコ属の魚がいる。岐阜県に棲息するスゴモロコ属には3種あり、イトモロコ・コウライモロコ・デメ

モロコがいる。従来スゴモロコとされていたものは、コウライモロコであることが最近判明した（川那部ほか、2001）。スゴモロコは琵琶湖の固有亜種である。スゴモロコ属の3種はどれも良く似ていて、緑褐色のやや光沢をもった縦条（鷹羽ノ如キ斑紋）が不明瞭だがあり、背部の大部分の鱗の頂部には暗色斑がある。先の文は、これらのことを言っているのだろう。スゴモロコ属3種はよく似ているので、同定するのが困難であるが、厳密に棲み分けているので、生息地によってどの種にあたるか推定することができる。イトモロコとコウライモロコは大きな河川の中下流部に生息するが、イトモロコは上流側にコウライモロコは下流側に分布が偏る。デメモロコはイトモロコ・コウライモロコと比べていっそう流れのゆるやかな、流れのない灌漑水路やため池に生息する（川那部ほか、2001）。長良川では岐阜市長良より上流の支流や支流の流れ込みでイトモロコが観察され、それより下流でコウライモロコが観察される。デメモロコは現在では少なくなっており、『岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物』によると、墨俣町、安八町、川島町、南濃町で確認記録がある。方言名の「やなぎもろこ」は、デメモロコ・モツゴから採集されている。コウライモロコには、「やなぎもろこ」と良く似た「やなぎばえ」が採集されている（金古、1990a）。ここは種名を特定せずにスゴモロコ属の魚種とした方がよいだろう。

#### 第八號

糞鱒（バヘ）魚ハ美濃国長良揖斐川諸川流ニ棲息スルモノニシテ形チ普通ノ鱒ト異ナルコトナシ然レトモ口尖キ丸ク体ハ銀色ニシテ圓ク肥大セリ大ナルモノ四五寸ニ過キズ毎年春季ヨリ夏季中最モ多ク捕フルモノトス

#### 第8号 糞鱒魚（くそばへ）

「鱒ト異ナルコトナシ然レトモ口尖キ丸ク体ハ銀色ニシテ圓ク肥大セリ」とある。形態的にはすこし違うようにも思えるのだが、「くそばえ」の名前からしてアブラハヤ（タカハヤを含む）とした。

#### 第九號

砂ホリ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ形チ麥ツキ魚ニ似テ口端稍尖レリ体ハ総テ黄褐色ニシテ背ニ黒キ細点アリ常ニ多ク砂底ニ潜行スルヲ以テ此稱アリ淡味ナリ大ナルモノ二三寸ニ過キズ毎年春季ヨリ夏季ノ頃多ク捕フルモノトス

#### 第9号 砂ホリ魚（すなホリ）

「形チ麥ツキ魚ニ似テ・・・常ニ多ク砂底ニ潜行スル」とある。カマツカのことだろう。しかし、「大ナルモノ二三寸ニ過キス」とある。川那部・水野（1989）によると、カマツカは「1年で7cm、2年で12cm、3年で18cmぐらいに成長し、2～3年で成熟する」とある。あまりにも小さいのではなかろうか。

#### 第拾號

カナハチ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ其形チ鯰魚ニ髣髴タリ然レトモ該魚ノ如ク成長セス僅カニ四五寸ヲ以テ極度トス体ハ茶褐色ニシテ頭部ニ深黒色ノ斑紋アリ鰭尾ハ両岐ニ分レ而シテ三個ノ鋸齒状ノ針ヲ具有シ容易ニ手ヲ觸レ難シ毎年夏期中多ク捕フルモノトス

#### 第10号 カナハチ魚（カナハチ）

「其形チ鯰魚ニ髣髴タリ然レトモ該魚ノ如ク成長セス僅カニ四五寸ヲ以テ極度トス・・・三個ノ鋸齒状ノ針ヲ具有シ・・・」とある。ナマズを小さくしたものに似ていて、針を持つていることから、ネコギギだろう。ネコギギには、「かなはち」の方言名も知られている。

#### 第拾壹號

黄類魚（キギウ・一名ザス）ハ濃飛両国各川ニ産スルモノニシテ常ニ水底ニ沈ミ砌石ノ間ニ棲ム其形鯰魚ニ似タリ色ノ黒キモノヲ黒ギギウトイフ黄赤ナルモノヲ赤ギギウト云フ又赤ネギ黒ネギノ稱アリ又背鰭及腮下ノ兩鰭ニ鋸刺各一ツアリ人ヲ螫セハ人大ニ痛ム故ニ川蜂トモ云フ頭大ニ口濶ク細齒アリ能ク小魚ヲ食フ口ニ兩鬚アリ身ニ鱗ナク尾ニ小岐アリ四季トモ捕獲スレトモ冬春殊ニ多シ大ナルモノ四寸ニ過キス

（註）形態説明の多くは、『本草綱目啓蒙』からの引用である。

#### 第11号 黄類魚（キギウ） 一名ザス

「鯰魚ニ似タリ・・・黒キモノヲ黒ギギウトイフ黄赤ナルモノヲ赤ギギウト云フ又赤ネギ黒ネギノ稱アリ・・・川蜂トモ云フ」とある。「ぎぎう」・「ざす」・「かわばち」はギギ科の総称であり、「くろぎぎう」・「くろねぎ」がネコギギ、「あかぎぎう」・「あかねぎ」がアカザを指す名であろう。

#### 第拾貳號

鯰魚ハ無鱗魚ノ種族ニシテ濃飛両国各川及池沼等ニ産ス其形大頭偃額、大口大腹、背色赤キモノヲ赤鯰ト云ヒ黒キモノヲ黒鯰ト云フ下腹白色或ハ金黄色ノモノアリ尾カ

岐ナクシテ鬚アリ齒アリテ肉食ス大ナルモノハ五六尺ニ過ク多藝郡下池ニ此ノ大ナルモノヲ多ク産ス雄ハ腹アリ雌ハ胎卵アリ卵粒粟ノ如シ而シテ此魚ハ四時常ニ捕獲ス（註）解説の一部は『本草綱目啓蒙』より引用している。

「赤鯰」・「黒鯰」も引用であり、岐阜県の方言名ではない。

#### 第12号 鯰魚（なまづ）

鯰魚はナマズに間違いはないだろうが、解説の中に「背色赤キモノヲ赤鯰ト云ヒ黒キモノヲ黒鯰ト云フ」とある。『本朝食鑑』の中に、「赤なまづ。清水の池のうち井川にあり。状常のなまづの如にして腹赤くひれに針あり。大きさ二三寸。」とある。アカザのことである。『本草綱目啓蒙』の中に「色赤キモノヲ、アカナマズト云、色黒キモノヲ、クロナマズト云、色白キモノヲ、シロナマズト云。・・・総テ三寸以下ナルヲ、ギチャト云。」とある。「ギチャ」とは、ギギの仲間のことである。ナマズとギギの仲間が明確には区別されていない。その影響がここの文にも出ている。

#### 第拾參號

白魚ハ濃飛両国各川ニ棲息スルモノニシテ鯉魚ヨリ體細ク口端尖レリ色澤ハ黒鯉ニ似テ総テ薄金色ヲ帯ブ大ナルモノハ三尺ニ過グ

#### 第13号 白魚（みごい）

白魚は、『本草綱目啓蒙』にミゴイ（和名鈔）とある。解説の中に、「鯉魚ヨリ體細ク口尖レリ」とある。ニゴイと断定して良いだろう。

#### 第拾四號

老川魚（白鱒變ジテ老川トナル）ハ濃飛両国各川流ニ棲息ス形鱒ニ似テ尻鰭ハ尾ヨリ大ナリ春季四五月ノ頃ハ體ハ総テ銀色ニ紅綠色ヲ帯ビ尾鰭及ビ目眶トモ赤クシテ最も美麗ナリ然レドモ秋ヨリ冬季中ハ銀色多クシテ紅色至リテ薄ク充分美麗ナラズ味モ亦春季ヨリ淡シ毎年春季ヨリ夏季中ニ多ク捕フ大ナルモノ五寸ニ過キズ

#### 第14号 老川魚（おいかわ）

白鱒變ジテ老川トナル」と解説が付いている。老川と白鱒が同じ種であることを知っている。「四五月ノ頃ハ體ハ総テ銀色ニ紅綠色ヲ帯ビ尾鰭及ビ目眶トモ赤クシテ」とある。「尻鰭ハ尾ヨリ大ナリ」とあることから、老川魚は婚姻色の出た雄を指していると思われる。

## 第拾五號

ムツ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息グ形状ハ略ホ白鱗ニ似タリ背鰭ノ鰭根ニ稍々薄黄色ニテ長三角形ニ紋アリ鰭尾共ニ黄色ナリ大ナルモノ一尺ニ及ブ春季ヨリ夏季ノ頃尤モ多ク捕獲スルモノニシテ味美ナリ

## 第15号 ムツ魚 (ムツ)

「白鱗ニ似タリ背鰭ニ稍々薄黄色ニテ長角形ノ紋アリ鰭尾共ニ黄色ナリ」とある。第18号に赤ムツ魚のあることから、ムツ魚は婚姻色の出ていないカワムツを言うのだろう。

## 第拾六號

ギンコ魚ハ美濃国安八郡揖斐川及溝沼中ニ棲息スルモ息ノニシテ形チ鱗魚ニ似テ小サク大ナルモノ一寸五六分ニ過キス色総テ白銀色ヲ帯ビ味ヒ佳ナラス漁季ハ毎年初夏ヨリ秋季ノ頃多ク捕フルモノトス

(註)「棲息スルモ息ノニシテ」は、「棲息スルモノニシテ」の誤りだろう。

## 第16号 ギンコ魚 (ギンコ)

「美濃国安八郡揖斐川及溝沼中ニ棲息スルモノニシテ形チ鱗魚ニ似テ小サク大ナルモノ一寸五六分ニ過キス」とある。ハエに似ていて小さく、大きくても1寸5～6分のような。『本草綱目啓蒙』の鱗魚の項の中に、メダカが出てくる。メダカが鱗魚の仲間であったことが分かる。生息場所も安八郡の溝・沼、すなわち平野部の流の緩い溝或は沼ということである。すぐ近い隣の愛知県で、メダカの方言名として「ぎんごばい(名古屋市)」・「きんこばえ(東春日井郡)」・「ぎんこばえ(愛知県西)」・「ぎんこびあ(愛知郡)」・「ぎんごびあ(愛知郡)」が採集されている。県内では、「きんす(柳津町)」・「ぎんた(大垣市)」・「ぎんたこ(大垣市)」の「ギンコ魚」に近い方言名が採集されている。これらのことから、ギンコ魚はメダカではないだろうか。ただ、「漁季ハ毎年初夏ヨリ秋季ノ頃多ク捕フルモノトス」と、漁をすると解説にある。メダカを食べるということは聞かないことではないが、岐阜県内ではまだ聞いたことがない。また、解説には「味ヒ佳ナラス」とある。『本草綱目啓蒙』の中のメダカは、「小魚ナリ。・・・長サー一寸許、・・・」とある。普通メダカは2～3センチメートルなので、大きさから考えるに、1寸5～6分はメダカの大きさではない。また、「色総テ白銀色ヲ帯ビ」とあり、体色も少しメダカとは違うようだ。メダカの方言名は、ウグイ・オイカワ・カワムツ・アブラハヤなどの稚魚と混同して使わ

れていることが多い。「ギンコ魚」は、メダカ(ハエ形魚類の稚魚を含む)のことではなからうか。

## 第拾七號

麥搗魚ハ美濃国長良川揖斐川筋ニ棲息スルモノニシテ形チ鱗魚ニ似テ体ハ黄褐色背ニ多クノ黒點アリ然シテ腹部ヨリ尾ニ至ル迄黒キ横線アリ淡味ナリ大ナルモノ三四寸ニ過キス毎年春季ヨリ夏季ノ頃最モ多ク捕フルモノトス

## 第17号 麥搗魚 (むぎつき)

「むぎつき」の名は、餌を食べるために頭を下にして河底を突っついているのが、縦杵で麦を搗いている様子に似ていることに由来するという。解説には、「体ハ黄褐色背ニ多クノ黒點アリ然シテ腹部ヨリ尾ニ至ル迄黒キ横線アリ」とある。コウライモロコならば、「むぎつき」の方言名が美濃加茂市・川島町・笠松町・白川町・七宗町・川辺町・美濃市・関市・岐阜市・墨俣町と広く採集されているし(金古,1990a)、河底の餌を突つつく習性も持っている。標準和名のムギツクほどには明確ではないが、体側に黒い線らしき模様もある。なお、ムギツクは福井・滋賀・三重県以西に分布する(川那部ほか,2001)。岐阜県にも揖斐川下流に生息するという情報があるが確認できていない。

第7号柳鱗魚でふれたようにコウライモロコを含むスゴモロコ属3種は大変よく似ており、混同されている可能性がある。コウライモロコの分布は、平野部に限られるので、美濃加茂市・白川町・七宗町・川辺町・美濃市・関市での記録は、コウライモロコによく似ていてより上流に分布するイトモロコを指している可能性がある。ここも種を特定せずスゴモロコ属の魚としておいた方がよいようだ。

## 第拾八號

赤ムツ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息ス形チ普通ノムツ魚ニ異ナルコトナシト雖モ色少シク濃ヤカナリ背鰭ノ鰭根ニ稍赤黄色ニテ長角形ノ紋アリ鰭尾及腮ノ下共赤黄色ナリ大ナルモノ一尺ニ及フ春季ヨリ夏季ノ頃多ク捕獲スルモノニシテ味ヒ美ナリ

## 第18号 赤ムツ魚 (あかムツ)

「形チ普通ノムツ魚ニ異ナルコトナシ」とあり、赤黄色の帯びることが説明されている。婚姻色のことである。赤ムツ魚は、婚姻色の出たカワムツの雄のことである。

## 第拾九號

川鱚ハ美濃国揖斐川及木曾川ノ末流ニ棲息スルモノニシテ軀至テ細長ク上唇ハ短ク下唇ハ細キ針ノ如クニシテ上唇ヨリ凡ソ十層倍モ長ク殆ント翠鳥ノ嘴ニ似テ其色薄黒ナリ軀ハ総テ銀腮ヨリ尾ニ至ル迄一條ノ細キ黒線アリ淡味ニシテ油少ナシ腸最モ苦シ食スルトキハ取去ヲ可トス大ナルモノ七八寸ニ過キス此魚ハ伊勢桑名ノ近海ヨリ上リ來ルノ説アリ

### 第19号 川鱚 (かわさより)

「揖斐川及木曾川筋ノ末流ニ棲息スルモノニシテ・・・」とあり、「上唇ハ短ク下唇ハ細キ針ノ如クニシテ上唇ヨリ凡ソ十層倍モ長ク・・・」とある。クルメサヨリで間違いないだろう。

#### 第貳拾號

鱚魚(センバラ)ハ濃飛兩國各川池沼中ニ産ス腹下赤色ニシテ大サー一寸五六分春ニ至レハ色最モ美麗ナリ味ヒ充分ニ佳ナラス腸苦シ食スルトキハ之ヲ去ルヘシー一名赤センバラト云フ

### 第20号 鱚魚(センバラ) 一名赤センバラ

『本草綱目啓蒙』の「鱚魚」に、「センピラ・勢州」・「センバラ・尾州」がある。これに従い、鱚魚にセンバラを当てたのであろう。『本草綱目啓蒙』には、「腹下ノヒレ紅色ナルモノヲ、アカタビラ 京 ト云ウ」と書かれている。このことが、「せんばら・赤センバラ」の一番の特徴のようだ。濃尾平野で多く見られ、婚姻色の赤いやリタナゴの可能性が高い。

#### 第貳拾壹號

黄鱚魚(一名油センバラ)ハ濃飛兩國各川池沼中ニ産ス腹下黄色ニシテ大サー一寸五六分春ニ至リ色最モ美麗ナリ味ヒ佳ナラス腸苦シ食スルトキハ之ヲ去ルヘシ

### 第21号 黄鱚魚(きいセンバラ) 一名油センバラ

「腹下黄色」と書かれている。このことからして、アブラボテで良いだろう。「油センバラ」の名もアブラボテの方言名である。

#### 第貳拾貳號

板鱚魚ハ濃飛兩國各川池沼中ニ産ス腹下ハ赤紫色ニシテ大サー一寸五六分体至テ薄シ故ニ板センバラノ稱アリ背鬣腹鬣共黒色ニテ間道アリ春季ニ至リ色最モ美麗トナル味ヒ佳ナラス腸苦シ食スルトキハ之ヲ去ルベシ

### 第22号 板鱚魚(いたせんばら)

「腹下ハ赤紫色ニシテ・・・体至テ薄シ故ニ板センバラノ稱アリ」とある。板のように薄いということからも、イタセンバラで良いだろう。

(註) タナゴ類の分類は、主に腹部の色でなされている。

この方法は『本草綱目啓蒙』のものである。「腹下〇〇色」という表現の仕方も同じである。

#### 第貳拾參號

白鱚魚ハ濃飛兩國各川流ニ棲息シ普通鱚魚ニ異ナルコトナシト雖もトモ色最モ銀白然シテ銀白中淡濃ニテ豎ニ斑紋アリ鱗尾白色尻鱗尾ヨリ大ニシテ其鱗端稍薄赤ヲ帯ブ春季ニ至リ變シテ美麗ナル老川トナル大ナルモノ四五寸ニ過キス毎年冬季中最モ多ク捕フルモノトス

### 第23号 白鱚魚(しらはえ)

「春季ニ至リ變シテ美麗ナル老川トナル」とある。オイカワの若魚である。成長するとオイカワになることについては認識している。

#### 第貳拾四號

水龜ハ濃飛兩國各川池沼中ニ住ミ色黒クシテ臭気ナキモノ即チ水龜ナリ一名イシガメト稱ス上甲ニ六角ノ紋ナミアリ下甲ニ横紋アリ牡ハ上甲低ク牝ハ高シ冬ハ土泥中ニ蟄シテ藏六ス春ニ至レハ出テテ水ニ入傍ニ人ナキトキハ石上ニ上リテ甲ヲ曝ス春季陸ニイデテ沙土ヲ掘コト深サ六寸許卵ヲ其中ニ産シテ土ヲ蓋フ八月中旬ニ至テ孵化ス(註) 解説の多くは、『本草綱目啓蒙』からの引用であり、「上甲ニ六角ノ紋ナミアリ」は「上甲ニ六角ノ紋十三アリ」の引用誤りである。また、「春ニ至レハ出テテ」も「春ニ至レハ出テ」の誤りである。

### 第24号 水龜(みずがめ) 一名イシガメ

『本草綱目啓蒙』には、水龜の説明に「江河池沢中ニ住。色黒クシテ臭気ナキモノ水龜ナリ。」とあり、イシガメだとある。第24号の水龜は、『本草綱目啓蒙』をそのまま引用したかと思われるような「色黒クシテ臭気ナキモノ即チ水龜ナリ一名イシガメト稱ス」と説明されている。クサガメは、腋下腺やそけい腺から悪臭を出すことが知られている。ここの水龜も、イシガメと決定してよいだろう。

#### 第貳拾五號

育鱮ハ美濃国木曾長良川筋ニ棲息ス形チ普通ノ鱮魚ニ異ナルコトナシト雖も頭ハギギウ魚ニ似テ平扁ナリ口濶ク

シテ鱗ナク脂肪多ク味美ナリ大ナルモノ三四寸ニ過キズ  
春季ヨリ夏季ノ頃稀レニ捕フルモノトス

### 第25号 育鱸(?)

「育鱸」は、「そだちどじょう ?」と読むのだろうか。読み方も分からない。色々の文献に当たったが、「そだちどじょう」に近い言葉にも出会わない。おそらく当て字であろう。「形チ普通ノ鱸魚ニ異ナルコトナシト雖モ頭ハギギウ魚ニ似テ平扁ナリ口潤クシテ鱗ナク脂肪多ク味美ナリ」とある。形はドジョウに似ているが、頭はギギの仲間のように少し扁平だという。「木曾長良川筋ニ棲息ス」とあることから本流ではなく枝川に棲むようだ。細い枝川ならば、形態からしてホトケドジョウではないだろうか。

### 第貳拾六號

麥稈鱸ハ美濃国長良川揖斐川筋ニ棲息スルモノニシテ形チ普通ノ鱸魚ニ異ナルコトナシ然レドモ体ニアジメ魚ノ如キ斑紋アリ腹部ハ総テ金黄色ヲ帯フ毎年四五月ノ頃ヨリ粟粒ノ如キ卵ヲ胎シ味ヒ最モ美ナリ大ナルモノ三四寸ニ及ブ四五ヶ月ノ頃ヨリ夏季中最モ捕フルモノトス  
(註)「四五ヶ月ノ頃ヨリ夏季中」は、「四五月ノ頃ヨリ夏季中」の誤りだろう。

### 第26号 麥稈鱸(むぎからどじょう)

「普通ノ鱸魚ニ異ナルコトナシ然レドモ体ニアジメ魚ノ如キ斑紋アリ・・・」とある。普通のドジョウに体が似ていて、アジメドジョウのような模様があるとなれば、シマドジョウだろう。シマドジョウの産卵期は4～5月ごろからなので記述は合っている。しかし、「腹部ハ総テ金黄色ヲ帯フ」の金黄色は、婚姻色であり産卵期だけのものである。

### 第貳拾七號

縞鱸・・・解説なし。

### 第27号 縞鱸(しまどじょう)

麥稈鱸(むぎからどじょう)の後に縞鱸(しまどじょう)の項が書かれている。どのように考えたらよいのだろうか?。県内の方言名分布を見ると、麥稈鱸の方が縞鱸よりも圧倒的に広い。同一種ではと考えながらも、広く使われている麥稈鱸を主体に説明しながら、縞鱸も無視できなかったのではないだろうか。

### 第貳拾八號

緋鱸ハ美濃国加茂郡和知村飛騨国大野郡大名田村溝中ニ産スルモノニシテ普通ノ鱸魚ニ異ナルコトナシト雖モ緋色ニシテ最モ美麗ナリ大ナルモノハ四寸ニ過ギズ然レドモ是ハ奇鱸ニテ捕ヘ獲ルコト至リテ稀ナリ

### 第28号 緋鱸(ひどじょう)

「普通ノ鱸魚ニ異ナルコトナシト雖モ緋色ニシテ最モ美麗ナリ」とある。ドジョウには、いろいろな色変りが生まれる。その一つのようなだ。産地名が書かれているのも面白い。「奇鱸ニテ捕ヘ獲ルコト至リテ稀ナリ」とある。

### 第貳拾九號

アジメ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ形状色澤斑紋等ハ殆ト麥稈鱸ニ似テ体少シク瘦セ大ナルモノ五寸ニ過キス毎年五月頃胎卵ス此際味最モ甘美ナリ

### 第29号 アジメ魚(アジメ)

「形状色澤斑紋等ハ殆ト麥稈鱸ニ似テ体少シク瘦セ・・・」とある。シマドジョウよりも細いとあり形態的にはアジメドジョウである。しかし、「毎年四五月頃胎卵ス此際味最モ甘美ナリ」とあり、産卵期はシマドジョウのものである。シマドジョウを「あじめ(大和町神路)」と呼ぶ所もあるが、その分布は狭い。ここの「アジメ魚」は、アジメドジョウとシマドジョウの区別がはっきりしていないようだ。アジメドジョウの漁期は、生殖腺が発達し、冬眠のためあじめ穴に入る秋である。ここは、体形よりも産卵期・食べる時期を重視してシマドジョウとする。

### 第参拾號

泥鱸ハ濃飛両国各川及田溝中ニ多シ姓好テ深泥ニ潜リ時々水面ニ浮テ沫ヲ吐ク形少鰻鱺ノ如クニシテ短ク鋭首團身鱗ナク鬚アリ蒼黒色ニシテ黒斑アリ斑ニ大アリ小アリ腹ハ白色或ハ金黄色ヲ帯フ尾ニ岐ナシ背鬣尾ニ連リ體粘滑ニシテ握リカタシ長キモノニ六七寸ニ過ク

(註) 解説の多くは、『本草綱目啓蒙』の引用である。

そのままではなく、少しは自分の文章に変えようと努力しているが、そのことが逆に誤りを起こすことになっている。『本草綱目啓蒙』では、「喜デ深泥ニ潜リ」を「姓好テ深泥ニ潜リ」と変えている。「姓好テ」は、「性好テ」とすべきだろう。「カタチハ小鰻鱺」を「形少鰻鱺」と変えている。やはり「小鰻鱺」が良い。「長キモノハ六七寸」を「長キモノニ六七寸」にしている。文からしても、

「長キモノハ六七寸」が良い。

### 第30号 泥鱸 (どじょう)

泥鱸はドジョウに間違いはないだろう。ただ、解説のほとんどが『本草綱目啓蒙』の引用である。

#### 第参拾壹號

鱒魚ハ濃飛兩國ノ各大川ニ産スト雖モ木曾川及ビ益田川ノ品ハ最モ甘美ニシテ且ツ大ナルモノハ三尺ニ過ク其ノ形ハ鮭魚ニ似テ鱗次極メテ細ナリ色淡青ニシテ赤斑アリ肉色ノ赤キコト鮭肉ノ如シ然シテ味ハ遠ク鮭魚ニ勝レリ毎年晩秋ノ頃下流ヨリ漸次上流ス十一月中旬ニ至ルマダ産卵ノ期節ナレバ雄ハ腹アリ雌ハ卵ヲ胎ム卵粒ハ殆ンド豌豆ノ如クシテ腹ニ充ツ其色黄赤透明ナリ之ヲ砂礫中ニ産付ス年々大網其他種々ノ漁法ヲ以テ捕獲ス

(註) 形態的な解説部分は、『本草綱目啓蒙』からの引用である。「形状ハ松魚(サケ)ニ似テ、鱗更ニ細ナリ。」を、「形ハ鮭魚ニ似テ鱗次極メテ細ナリ」と変えて引用している。「次極メテ」という言葉が有るのかどうか知らない。

### 第31号 鱒魚 (ます)

「濃飛兩國ノ各大川ニ産スト雖モ木曾川及ビ益田川ノ品ハ最モ甘美ニシテ」とある。濃飛兩國と書かれているが、この解説からはアマゴの降海型であるサツキマスを中心に指しているものと考えてよいだろう。しかし、鱒魚の解説の多くは、『本草綱目啓蒙』の引用である。「色淡青ニシテ赤斑アリ」の部分引用している。赤点ではなく赤斑であることから、この鱒魚はサクラマスのような。形態的な説明はサクラマスであるが、分布的にはサツキマスをも含んでいる。鱒魚はサツキマス・サクラマスの両方を指すものと考えざるをえない。「晩秋ノ頃下流ヨリ漸次上流ス」とある。春に遡上を始めることを知らなかったのだろうか。夏の初め頃には、産卵場近くまで来ている。

#### 第参拾貳號

鹹魚ハ濃飛兩國各川ニ棲息ス形川鯉ニ似テ鱗細ク色ハ薄青色鱗尾共黄色ヲ帯フ大ナルモノ一尺四五寸ニ及ブ味ヒ淡白ナリ毎年五六月ノ頃ヨリ交尾産卵ス此候捕獲最モ多シ

### 第32号 鹹魚 (うぐい)

「鹹魚」は、ウグイでよいだろう。

#### 第参拾参號

鮠魚(ハヘ)ハ飛驒国宮川諸川渡ニ棲息スル一種ノ鮠ニシテ形テ鱒魚ニ似テ少サク鱗極メテ細カニ体ハ総テ薄茶黄色ヲ帯ビ然シテ腹部ヨリ尾ニ至ル迄青色ニテ丸キ紋點アリ最モ美ナリ大ナルモノ一尺余ニ及フ春分ヨリ初秋ノ頃迄多ク捕フルモノトス

(註) 「宮川諸川渡ニ」は「宮川諸川流ニ」の誤りで、「形テ鱒魚ニ似テ少サク」も「形チ鱒魚ニ似テ少サク」だろう。「最モ美ナリ」は、「味最モ美ナリ」であろう。

### 第33号 鮠魚 (ハヘ)

「飛驒国宮川諸川渡ニ棲息スル・・・形チ鱒魚ニ似テ少サク・・・腹部ヨリ尾ニ至ル迄青色ニテ丸キ紋點アリ・・・」とある。分布・形態からして、ヤマメのことである。アマゴとの違いをしっかりと認識していたようだ。現在でも、飛驒ではヤマメを「はえ」と呼んでいる。

#### 第参拾四號

嘉魚美濃飛驒兩國山溪ノ深淵ノ中ニ産ス常ニ清冷ノ流水ヲ好ミ水中ノ窟穴ニ居故ニイハナノ名アリ形鱒魚ニ似テ小ク然シテ山鯉ノ如クナル斑紋ナシ甚タ油脂多クシテ之ヲ焼ケバ其流ルルコト鰻鱺魚ヲ焼クカ如シ秋分多ク捕フ味最モ甘美小ナルモノハ三四寸大ナルモノハ一尺ニ過ク身ニ黒斑及細朱點アリ鱗最モ細ナリ雄ハ腹アリ雌ハ卵胎アリ其卵小粒ノ豌豆ノ如ク九月下旬ノ頃ヨリ産卵ヲ始ムト云フ

(註) 随所に『本草綱目啓蒙』からの引用が見られる。「鱗最モ細ナリ」は引用するときに誤ったもので、元は「鱗最モ細ナリ」である。

### 第34号 嘉魚 (いわな)

解説の多くは、『本草綱目啓蒙』の引用である。「形鱒魚ニ似テ小ク然シテ山鯉ノ如クナル斑紋ナシ・・・」とあるが、『本草綱目啓蒙』には「山鯉」は「ヤマベ」とルビが振られている。さらに、「ヤマベハ津軽ノ方言ニシテ、京師ニテハ、アマゴト云。」とある。ヤマメ・アマゴにあるパーマークのないことを説明しているようだ。「身ニ黒斑及細朱點アリ・・・」とあるが、「細朱點」があるということは、太平洋側に分布するヤマトイワナのことだろう。

#### 第参拾五號

錢龜ハ濃飛兩國各川池沼中ニ住ミ色黒クシテ臭気ナキモノナリ上甲ニ六角ノ紋ナミアリ下甲ニ横紋アリ牡ハ上甲低ク牝ハ高シ冬ハ土泥中ニ潛ム躰至ッテ小サクシテ殆ト

錢形ノ如シ故ニ此名アリ大抵甲ノ堅一寸五六分ニシテ其形ヨリ成長スルコトナシトイフ或ハ云フ水龜春季ニ至リ陸ニ出テ砂上ヲ掘ルコト深サ六寸許卵ヲ其中ニ産シテ土ヲ蓋ヒ八月中旬ニ至リ孵化スルモノヲ錢龜ト云フ是レ即チ水龜ノ子ナリトノ説アリ

### 第35号 錢龜 (ぜにがめ)

「八月中旬ニ至リ孵化スルモノヲ錢龜ト云フ是レ即チ水龜ノ子ナリトノ説アリ」とある。孵化したばかりの、小さなイシガメの子のことでよいだろう。形態的な説明も「第24号 水龜」と同じであり、それも『本草綱目啓蒙』からの引用である。そして、同じ箇所を写し誤っている。「上甲ニ六角ノ紋ナミアリ・・・」とあるが、正しくは「六角ノ紋十三アリ」である。

### 第参拾六號

田鯉（一名牛魛）ハ濃飛両国ノ川流及池沼溝中ニ産ス形魛ニ似テ色較々薄シ頭頂扁ニシテ口濶ク大サ二寸ニ過キス鱗尾共薄キ赤黄色ナリ味淡ニシテ充分ニ佳ナラス

### 第36号 田鯉 (たごい) 一名牛魛 (うしもろこ)

「濃飛両国ノ川流及池沼溝中ニ産ス形魛ニ似テ色較々薄シ頭頂扁ニシテ口濶ク・・・鱗尾共薄キ赤黄色ナリ・・・」とある。田鯉(たごい)は関市付近でウシモツゴを指す方言名として残っている。ウシモツゴには、「けんかもろこ」の方言名もあるが、関市付近では後から入ってきたものだという。ウシモツゴを観察すると、鯉を小さくした姿にそっくりである。上手に名付けられた方言名だと感心する。和名のウシモツゴは、岐阜県の方言名に由来するという。方言名の中の牛は、通常は「大きいこと」を言い表すのに使われる。この場合の牛は、闘牛の牛のように喧嘩ばかりしている様子を言っている。

### 第参拾七號

鮒魚ハ美濃国各川及池沼溝中ニ棲息ス形チ鯉魚ニ似テ扁平ナリ体色ハ総テ銀光ニシテ口端丸シ毎年四五月ノ頃ヨリ雌ハ鰭(マコ)アリ雄ハ腹アリ此際及冬季中ハ味キ最も甘美ナリ而シテ流水中ニ棲ム者ハ骨硬ク肉脆ク味佳ナラス池沼中ノモノハ骨軟ニシテ肉肥味美ナリ因テ多藝郡下池産ハ扁平肥大ニシテ頗ル甘美ナリ毎年巨額ノ収益ヲ得ルモノトス

(註)『本草綱目啓蒙』から一部引用して書いている。

### 第37号 鮒魚 (ふな)

「鯉魚ニ似テ扁平ナリ体色ハ総テ銀光ニシテ・・・」

とある。フナは現在、さらに種が細分されているが、ここはフナでよいだろう。

### 第参拾八號

川鯪ハ美濃国揖斐川筋ニ棲息ス頭扁ニシテ体ハ鰻ニ似タリ然シテ腹部ニ茶色ニシテ數條ノ細線アリ大ナルモノ一尺四五寸ニ及フ味亦鰻ニ似テ甘美ナリ毎年晩秋ノ頃ヨリ冬季中多ク捕獲ス且此魚ハ桑名及伊勢ノ近海ヨリ遡リ来ルノ説アリ

### 第38号 川鯪 (かわぼら)

『本草綱目啓蒙』に「川鯪」の記載がある。その記載を読むに、「川鯪」はボラの若魚のようである。ボラの若魚の呼び名が列記してあり、その中に「濃州ニテニ寸許ナルヲ、テゴロボト云、勢州ニテ、デコロボ或ハ、デコト云。」とある。「川鯪」は、「てごろぼ」と読むべきなのだろうか。大漢和辞典を引いても「鯪」の音は分からないとあるが、「子」は黒色を意味し「子魚」でボラをさすと『和漢三才図会』にある。「鯪」はボラを意味する字なので素直に「かわぼら」と読むことにした。丹羽(1954)に、ボラ(カワボラ)の名がある。このことからしても「川鯪」は、「かわぼら」と読んでよいだろう。

### 第参拾九號

ヌメリ魚(一名ガマハへ油魚)ハ美濃国長良川揖斐川筋ニ棲息ス形鮎魚ニ似テ鱗極メテ細ク殆ント無鱗魚ノ如シ脂肪多クシエ体最モ滑カナル故ニ此稱アリ鱗尾共薄黄色ニシテ味ヒ美ナリ大ナルモノハ七八寸ニ及フ腮下ヨリ尾ニ至ル迄一條ノ細線アルモノアリ又其線ノ判然ナラザルモノアリ判然ナルモノハ脂肪差ニ少クシテ判然ナラザルモノヨリ味ヒ佳ナラス毎年七八月頃多ク捕フルモノニシテ産卵モ同季ナリ

(註)『本草綱目啓蒙』では、鱗部を竜類・蛇類・魚類・無鱗魚類に分けている。無鱗魚類には、ウナギ・ドジョウ・ナマズ・サンショウウオ等が属している。

### 第39号 ヌメリ魚 (ヌメリ) 一名ガマハへ・油魚 (あぶら)

「形鮎魚ニ似テ鱗極メテ細ク殆ント無鱗魚ノ如シ脂肪多クシテ体最モ滑カナル故ニ此稱アリ」とある。さらに、「腮下ヨリ尾ニ至ル迄一條ノ細線アルモノアリ又其線ノ判然ナラザルモノアリ」とある。アブラハヤとタカハヤに気が付いていたようだ。先に書いたように、「ガマハエ油魚」は「ガマハエ・油魚」である。アブラハヤの方言名として、「ぬめり」・「あぶら」が採集されている。「がまはえ」は、残念ながら残っていないようだ。

## 第四拾號

鰻魚ハ濃飛兩國ノ流水中ニ産ス池沼溝中ニモ亦産ス形長クシテ蛇ノ如ク背ハ蒼黒ニシテ肉鬣アリ尾ニ連ル腹ハ金黃色隠然トシテ斜文アリ鱗ナク粘滑ニシテ捕ヘガタシ之ヲ焼ケバ油流ルルガ如ク味最モ美ナリ然シテ美濃国多藝郡下池ノ産ハ大ナルモノ目方三四百目ヲ超ユ他国ヘ輸送スルコト最モ多シ

(註)『本草綱目啓蒙』からの引用が多い。

## 第40号 鰻魚(うなぎ)

「形長クシテ蛇ノ如ク」と記されている。「蛇ノ如ク」という表現が面白い。一般人に知らせるために、良く知られているものを例に引いて説明している。ウナギの場合には蛇なのであろう。ウナギに間違いない。

## 第四拾壹號

緋鮒ハ美濃国郡上郡歩岐島村字與太郎淵ト稱スル九十坪餘ノ一ノ沼池ニ産ス形状ハ普通ノ鮒ニ異ナルコトナシト雖モ其色澤ハ最モ美麗ナル緋色ニシテ通常金魚ノ遠ク及ブ所ニアラス大サハ凡六七寸ニ過キス而シテ一歳ヨリ三四歳迄ハ黒緋ノ班色或ハ黒等ニ時々變色スレドモ五歳ニ至チテハ緋色トナリ年々其色依然トシテ變セスト云土人往々金魚ト共ニ池ニ畜養シテ玩弄ス

## 第41号 緋鮒(ひぶな)

「郡上郡歩岐島村字與太郎淵ト稱スル九十坪餘ノ一ノ沼池ニ産ス」とある。御母衣ダムを造る時に、資材置場として埋め立てられ与太郎淵はなくなったが、前谷の村間ヶ池と繋がっていてどんな早魃にも枯れることはないと言われていた。『白鳥町史』に、「歩岐島から干田野へ上る登り口の北の山際にあった淵で、昔、与太郎という男が落ちて、鮒になり、淵の底にかくれた。」という伝承が書かれている。緋鮒の記録は残っていないが、上流域に近い歩岐島に鮒が生息していたことが伺える。緋鮒は珍しい魚なので、知っている人が残っている可能性がある。

## 第四拾貳號

鮭魚ハ飛驒国吉城郡宮川筋へ毎年十月頃ヨリ十二月ノ頃越中国ヨリ遡リテ來レルモノニシテ形チ鱒魚ニ似テ大ニ鱗粗ナリ然シテ口尖少シク尖レリ産卵ノ季モ又同季ニシテ此際全体黒色ヲ帯ビ腹部ニ紅紫黒ノ斑紋ヲ現ス雌ハ豌豆ノ如キ卵ヲ胎シ陰孔墳起シテ腹膨脹シ雄ハ臍アリテ唇肉減ジテ齒形鋭ク其状自ラ雌魚ヨリ威アリ大ナルモノハ一貫七八百目ニシテ味ヒ最モ甘美ナリ然ルニ近來吉城郡

大富鉦山ノ鉦業隆盛ナルト山林ノ伐木甚キカ爲メ土砂ヲ押流ストニ因リ捕魚ノ數ハ從來ヨリ減少シ僅カニ一ヶ年ノ収獲高參拾圓内外トス

## 第42号 鮭魚(さけ)

「吉城郡宮川筋へ毎年十月頃ヨリ十二月ノ頃越中国ヨリ遡リテ來レルモノニシテ形チ鱒魚ニ似テ」とある。当時はダムもなく、富山からサケが遡って来たのである。一方では、「山林ノ伐木甚キカ爲メ土砂ヲ押流ストニ因リ捕魚ノ數ハ從來ヨリ減少シ」とある。山林開発による土砂の流入により、遡るサケの数が減り始めている。

## 第四拾參號

カブ魚(一名セカブ)ハ濃飛兩國各川流ニ棲息スルモノニシテ形チビンガ魚ニ似テ頭及口ハ大ヒナリト雖モ胸下ニ腕形様ノ器ナシ尾端丸ク色黒茶色ナルアリ白茶色様ナルアリ少シノ變色ニテ數種アレトモ同物同名ナルヲ以テ茲ニ贅セス腹部ヨリ尾ニ至ル迄鷹ノ羽様ノ黒キ斑紋アリ毎年初夏ヨリ秋分迄多ク捕フルモノトス

## 第43号 カブ魚(カブ) 一名セカブ

「形チビンガ魚ニ似テ頭及口ハ大ヒナリト雖モ胸下ニ碗形様ノ器ナシ・・・腹部ヨリ尾ニ至ル迄鷹ノ羽様ノ黒キ紋様アリ」とある。形態、「かぶ・せかぶ」の方言名から考えてカジカのことだろう。逆に、「びんが魚」はカジカと形が似ていて、胸に吸盤を持つ魚のようだ。

## 第四拾四號

チンチコ魚(一名ロレコ)ハ濃飛兩國各川流ニ棲息スルモノニシテ常ニ石間ニ潜ミ形チビンカ魚ニ似テ小サク大ナルモノ一寸五六分ニ過キス口大キク尾尖丸ク体白茶色ニシテ濃カナル赤茶色ノ細点アリ胸下ニ丸キ碗形ニモノアリ石ニ吸ヒ付ク器ナリ味ヒ美ナリ毎年初夏ノ頃ヨリ夏季中最モ多ク捕フルモノニシテ産卵モ同季ナリ可児郡地方ノ小川等ニテ捕獲スル産額モ亦少ナカラズ

## 第44号 チンチコ魚(チンチコ) 一名ロレコ

「形チビンカ魚ニ似テ小サク大ナルモノ一寸五六分ニ過キス口大キク尾尖丸ク体白茶色ニシテ濃カナル赤茶色ノ細点アリ胸下ニ丸キ碗形ノモノアリ(石ニ吸ヒ付ク器ナリ)」とある。方言名の「ちんちこ」と「ろれこ」を同時に持つのはカワヨシノボリであるが、一般にはカワヨシノボリとヨシノボリをはっきりとは区別して呼んでいないので、ヨシノボリ類としておいた方がよいだろう。「形ビンカ魚ニ似テ小サク」は、「形はビンカ魚に似て

いるが、ピンカ魚に比べると小さい」と訳すことが出来る。逆に、ピンカ魚はヨシノボリ類よりも大きいということになる。ピンカ魚解明の手掛かりの一つになる。

#### 大四拾五號

鯰魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノナレトモ性素清水ヲ好ムヲ以テ山間溪谷ノ清冷ナル流水中ニ多シ形チ嘉魚(イワナ)ニ似テ体扁ク色濃青色ニシテ細カナル朱點アリ甚タ油脂多シ毎年多ク捕フ味最モ甘美ナリ小ナルモノハ三四寸大ナルモノハ一尺ニ過ク鱗最モ細カニシテ雄ハ腹アリ雌ハ胎卵アリ其卵小粒ノ豌豆ノ如シ毎年九月頃ヨリ産卵ヲ始ムト云フ

#### 第45号 鯰魚(アマコ)

「形チ嘉魚(イワナ)ニ似テ体扁ク色濃青色ニシテ細カナル朱點アリ」とある。朱点のあることから、アマゴに間違いないだろう。

#### 第四拾六號

鮎ハ美濃国長良、木曾、揖斐川其他諸川ニ棲息スト雖トモ長良川ノ品最モ腴膩甘美ニシテ他産ニ勝レルコト遠シ其形ハ頭小ク口ニ細齒アリ細鱗淡黄腹白ク光澤アリテ尾鰭ハ黄色ナリ而シテ一種ノ香氣アリ毎年晩春ノ頃下流ヨリ漸次遡ル然レトモ猛雨連日各川暴漲シ或ハ一時降雨ノ爲メ流水甚タ濁ルトキハ遡流半途ニシテ止ムコトアリ八月下旬ヨリ九月下旬ニ至ルマデ産卵ノ期節ニテ雄ハ腹アリ雌ハ卵ヲ胎シ細粒粟ノ如ク腹ニ充ツ石上或ハ砂礫中ニ産着ス此候頭最少ク肥大ニシテ味極メテ美ナリ實ニ賞スルニ堪ヘタリ産卵後河ヲ下ル時ニ及ビテ斑色稍黒ク体瘦セ頭太ク脂ノ脱セル者ヲ「サヒアユ」又「オチアユ」ト云ヒ味佳ナラスシテ復タ啖卵フニ足ラス稀ニ經年ノモノアリ土人「アイキヤウ」ト呼フ産卵ノ頃ハ大ナルモノ一尾百ニ三十目小ナルモノニテ三四十目ニ至ル此際鵜飼其他種々ノ漁法ヲ捕獲ス其價年々凡八萬圓内外ノ巨額ニ至ル今慈ニ大小二尾ヲ描キテ以テ其概況を示ス

#### 第46号 鮎(あゆ)

アユには、形態的に似通ったものはいないので誤りようがないだろう。美味しい魚だけに生態も良く知られていたようだ。「産卵後河ヲ下ル時ニ及ビテ斑色稍黒ク体瘦セ頭太ク脂ノ脱セル者」を、「サヒアユ」又「オチアユ」と言い、味は良くないと言っている。さらに、「稀ニ經年ノモノアリ」。これを「アイキヤウ」と呼ぶと言っている。「あいきょう」の名は、今も一部の人達の間で使われている。

#### 第四拾七號

ハゼ魚ハ美濃国木曾川長良川筋ノ下流ニ棲息スルモノニシテ其形状川ハゼニ似タリ然シテ体ハ淡褐色ニシテ白キ斑點薄ク胸下ニ丸キ碗形ノモノアリ大ナルモノ四五寸ニ過ギス毎年初夏ヨリ秋分マデ多ク捕フルモノトス

#### 第47号 ハゼ魚(ハゼ)

「下流ニ棲息スルモノニシテ其形状川ハゼニ似タリ然シテ体ハ淡褐色ニシテ白キ斑點薄ク胸下ニ丸キ碗形ノモノアリ」とある。生息場所・形態からしてマハゼでよいだろう。

#### 第四拾八號

鯉魚ハ美濃国恵那郡中ニテ多ク養育ス就中付知明知ノ両村ハ毎戸畜養セサルモノナシ該魚ノ種類ニ五種アリ即チ緋藍黑白斑是ナリ大ナルモノハ三尺ニ過ク頭小ニシテ身團ナリ年々他国へ輸送シ巨額ノ収益ヲ得

#### 第48号 鯉魚(こい)

野生のコイも多く生息していたはずだが、恵那郡での養殖のことが中心的に書かれている。流通経済から見て、養殖コイが中心であったのだろうか。

#### 第四拾九號

八ツ目鰻ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ色澤形状共普通鰻魚ニ同シ然レ共目ノ如キモノハツアリ故ニ八ツ目鰻ノ名稱アリ肉鬣尾ニ連リ腹部ハ薄赤色鱗ナク粘滑ナリ人之ヲ嫌フテ食セサレトモ乾物トナシ薬店ニ於テハ販賣ス大ナルモノ七八寸ニ過キズ

#### 第49号 八ツ目鰻(やつめうなぎ)

「色澤形状共普通鰻魚ニ同シ然レ共目ノ如キモノハツアリ故ニ八ツ目鰻ノ名稱アリ・・・大ナルモノ七八寸ニ過キズ」とある。カワヤツメは日本海側に分布するが、宮川のような上流までは遡上しない。それに、大きいても7~8寸ということから、ここの八ツ目鰻をスナヤツメとした。ただ、「乾物トナシ薬店ニ於テハ販賣ス」とあるのが気になる。スナヤツメも薬にするが、カワヤツメの方が薬としては一般的である。

#### 第五拾號

胡麻鰻(一名ジネンジョ鰻)ハ流水又ハ池沼溝中ニ産スルモノナレトモ至テ僅少ナリ色澤形状共普通鰻魚ト同シクシテ総身ニ黒點アリ故ニ胡麻鰻ノ名稱アリ或ハジネンジョ鰻トモ稱ス肉鬣アリ尾ニ連ナリ腹白シ鱗ナク粘滑ナ

リ脂肪多ク普通鰻魚ヨリ甘美ナリ大ナルモノニテ二尺内外トス

### 第50号 胡麻鰻（ごまうなぎ） 一名ジネンジョ鰻

「普通鰻魚ト同クシテ総身ニ黒點アリ故ニ胡麻鰻ノ名稱アリ或ハジネンジョ鰻トモ稱ス」とある。そして、「大イナルモノニテ二尺内外トス」とある。郡上郡白鳥町に「ませんぼうなぎ」という方言名がある。馬小屋の出入り口を塞いでいる棒のことを「厩栓棒」と呼ぶ。「厩栓棒」は、大人の腕ほどの太さがあり、長さも長く、オオウナギの名称に相応しい。「ごまうなぎ（白鳥町）」の方言名も採集されているが、特別大きいとは聞かない。個体数は少ないようで、希にしか見られないようだ。『本草綱目啓蒙』に、「京師ニモ常ノウナギノ大サニシテ、白点アルモノアリ。ゴマウナギトヨブ。油多ク、味美ナリ。濃州ニモ多シト云。」とある。黒点ではなく白点を持つウナギなので同じものなのかどうか分からないが、濃州におけるゴマウナギの名前は古くから知られていたようである。「ごまうなぎ」の名の分布していることも事実だが、形態的な解説は『本草綱目啓蒙』から引用されている。ここの胡麻鰻はその記載が元になっているのではないだろうか。分布についての記載がないのは、解説のないもの（縞鰻・落鰻・ドンコツ・山鳥ビンガ）を除けばこの胡麻鰻だけである。

『本朝食鑑』に、「やまのいもが化してうなぎとなる」などの俗説が古来言われていたとある。その通りで、卵を持ったウナギを誰も見たことがなく、もちろん産卵も見たことがなかったことから、このような俗説が生まれたのである。この俗説は、ウナギについてのものであり、オオウナギのものではない。「ジネンジョ鰻」のジネンジョは山芋のことで、「やまいもが化してうなぎとなる」の系列に属する名称であり、「ジネンジョ鰻」はオオウナギではなくウナギと考えてよいだろう。

ゴマウナギについて松井（1971）は『ウナギの本』の中で「オオウナギの若年魚のようである」と述べているが断定まではしていない。四万十川の川漁師の山崎（1993）は「オオウナギには斑点が見られるが、一方（ウナギ）にはない。ただしゴマウナギというのは全体に黒い斑点があるが、これは日本産ウナギと別種のものでなく、皮膚の色素の変化であろう。」と述べている。さらに長良川流域の大和町と白鳥町2カ所のウナギ漁師から「普通のウナギと同じだが黒点があり、ゴマウナギと呼んでいた。ウナギよりも温かい水を好むようで大川よりも水田の水路や用水路にいた。オオウナギといわれるようなウナギはいない。」という聞き取りを得ている。

これらのことを総合すると、「胡麻鰻」はオオウナギよりも「黒点を持つウナギ」とした方が良いように思われるが、ゴマウナギがウナギよりも温かい水を好み、ウナギと生息場所を分けていたとすると、ゴマウナギが熱帯産のオオウナギの若年魚である可能性は完全には否定できない。

### 第五拾壹號

針魚ハ美濃国長良川揖斐川筋及厚見郡加納町舊加納藩城郭要害ノ外堀（字長刀堀ト稱ス）等ニ多ク棲息スル小魚ニシテ頭ハ薄赤ク総身ハ濃綠色且ツ斑紋アリテ最モ美麗ナリ鰭下腹部及背ニ針アリ人ヲ螫ス故ニ針魚ノ稱アリ大サ凡ソ一寸五六分ニ過キス雌ハ淡灰色ニシテ綠色ナシ而シテ常ニ尾端ヲ横ニ曲ケテ運動ス人此魚ヲ食セスト云フ一説ニ此魚ハ前世界ノ魚ナリト稱シテ甚タ之ヲ貴重スルモノアリ

（註）「人ヲ螫ス」は、文脈からして「人ヲ螫ス」の誤りだろう。

### 第51号 針魚（はりうお）

「頭ハ薄赤ク総身ハ濃綠色且ツ斑紋アリテ最モ美麗ナリ鰭下腹部及背ニ針アリ人ヲ螫ス故ニ針魚ノ稱アリ」とある。繁殖期のハリヨの雄の説明である。種名よりも「針魚」の読みを何とするか迷ったのだが、方言名「はりうお」の分布がある程度広い（山県郡・岐阜市・安八郡・本巣郡・養老郡）ことから（はりうお）を当てることにした。

### 第五拾貳號

ビンガハゼ魚ハ美濃国揖斐川筋ニ多ク棲息スルモノニシテ形カブ魚ニ似テ体鼠青色胸部ハ紫ヲ帯ビ腹ハ白色鱗ナク鯰魚ニ似テ脂肪多シ尾端丸ク味甘美ナリ大ナルモノ五六寸ニ過キス毎年初夏ヨリ秋季ノ頃迄多ク捕フルモノトス

### 第52号 ビンガハゼ魚（ビンガハゼ）

「形カブ魚ニ似テ体鼠青色胸部ハ紫ヲ帯ビ腹ハ白色鱗ナク鯰魚ニ似テ脂肪多シ尾端丸ク味甘美ナリ大ナルモノ五六寸ニ過キス」とある。以前、岐阜市藪田の川漁師の方から、「かわふぐ」を捕ったからと連絡をいただき、直ぐに見に行った。それはアユカケであったが、方言名で「かわふぐ」と言われるように、色・姿形が本当にフグによく似ていた。「ビンガハゼ魚」の解説を読んで、直ぐにアユカケをイメージした。アユカケと決めるには弱いのだが、アユカケには「びんが（美並村粥川）」の

方言名もある。しかし、「揖斐川筋ニ多ク棲息する」とあることから、方言名の多くが長良川筋のものであり、揖斐川筋からは採集されていないことが気になる。

『揖斐川町史』には生息する魚類の中にカマキリ（アユカケの別名）の記載があった。揖斐川町で生息するならば、下流の揖斐川にもいることだろう。

#### 第五拾参號

落鰻・・・解説なし

#### 第53号 落鰻（おちうなぎ）

「落鰻」という名称のみ記載があり、解説はない。産卵のために海へ下って行くウナギを指しているのだろう。

#### 第五拾四號

川ハゼ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ形ピンカ魚又ハカブ魚等ニ似テ鱗細ク頭及ビ口ハ大ヒナリ尾端圓ク色黒茶色ニシテ背鰭ヨリ尾ニ至ル迄白キ斑点アリ胸下ニ丸キ碗形（石ニ吸付器ナリ）ノモノアリ毎年初夏ヨリ秋分迄多ク捕フルモノトス大ナルモノ三四寸ニ過キス

#### 第54号 川ハゼ魚（かわハゼ）

「形ピンカ魚又ハカブ魚等ニ似テ・・・色黒茶色ニシテ背鰭ヨリ尾ニ至ル迄白キ斑点アリ胸下ニ丸キ碗形ノモノアリ」とある。しかし、ハゼに川が付いているのは、海に棲むハゼと区別するためであり、基本的にはハゼの形をしているはずである。「背鰭ヨリ尾ニ至ル迄白キ斑点アリ」というこの記載に近いものとなると、ハゼ科のウキゴリぐらいではなからうか。

#### 第五拾五號

ハザコ魚ハ無鱗魚即チ爬蟲ノ種族ニシテ美濃国武儀郡津保谷川板取川同国郡上郡ノ溪流等ニ多ク産スルモノナリ然レドモ水中ノミナラズ稀ニハ陸ニ上リ深山落葉中ニ潛息スルコトアリ大ナルモノハ三四尺ヨリ五六尺ニ過グ頭ノ大ニシテ扇團ノ如ク口潤ク眼球至テ小ナリ形鮠魚ニ似テ四足アリ前足ハ四指後足ハ五指ナリ頭背ニ色澤ハ淡黒灰色ニシテ疣瘡滿布シ外皮ニ大小黒斑アリ腹ハ灰白色尾ハ稍狭クシテ扁平ナリ脇ハ肌柔カニシテ皺多シ鱧鱗魚等ノ小魚ヲ食フ土人之ヲ賞味スレトモ外皮ノ悪臭アルヲ以テ之ヲ捕フレハ先ヅ樹枝ニ懸ケ下ヨリ火ヲ焼キ外皮ヲ剥脱セシメテ後食フ其ノ叫フヤ殆ト人ノ嘔ガ如シ肉潔白ニシテ味最モ美ナリト云フ

#### 第55号 ハザコ魚（ハザコ）

「大ナルモノハ三四尺ヨリ五六尺ニ過グ・・・鮠魚ニ似テ・・・」とある。オオサンショウウオのことであり、今調査すると平均70~80センチメートルぐらいだが、その当時は大きなものが棲息していたようだ。『本草綱目啓蒙』の「鮠魚」の項を読むと、鮠魚はオオサンショウウオを含むサンショウウオ類全体の名前のようだ。そのあたりのことが、「水中ノミナラズ稀ニハ陸ニ上リ深山落葉中ニ棲息スルコトアリ」に現れている。

#### 第五拾六號

石蟹ハ濃飛両国ノ山谷石間溪澗中ニ棲息スヤマカニベニカニト稱ス甲ハ赤色又ハ紫色ニシテ小ナルモノハ寸ニ盈ス大ナル者ハ二寸許天陰ルトキハ陸行シ多クハ行人ノ爲メニ踐殺サル性直行スルコト能横ニ走ルコト速ナリ両手ニ鉗アリ其ノ次ニ八足アリ皆尖爪アリ殻ハ堅厚ニシテ脆シ時々蛻メ新殻ニ換フ其ノ眼ハ外ニ出鰓ノ眼ノ如クニシテ堅シ是ヲ骨眼ト云フ腹下ニハ卷キ反シタル厚キ殻アリ是ヲ臍ト云フ臍ニ潤狭ノ別アリ狭長ナルハ雄ニシテ潤圓ナルハ雌ナリ山間魚類ニ乏シキ土地ニ於テハ之ヲ煮テ食用ニ供ス

（註）『本草綱目啓蒙』から引用しているのだが、「性直行スルコト能横ニ走ルコト速ナリ」は「性直行スルコト能ハズ横ニ走ルコト速ナリ」の写し誤りである。

#### 第56号 石蟹（いしがに）

「山谷石間溪澗中ニ棲息スヤマカニベニカニト稱ス」とある。先の文は、『本草綱目啓蒙』の「石蟹」に書かれている文と同じであり、「やまかに（大和本草）」の名も記されている。サワガニであることには間違いないが、「やまかに」が、岐阜県の方言名かどうかについては疑問である。

#### 第五拾七號

糠海老ハ濃飛両国各川ニ産ス鼻尖リ鬚長ク背ニ斷節アリ尾ニ硬甲アリ足ノ數ハツアリ好テ躍ル其腸腦ニ属シ其ノ子腸外ニアリ生ナルモノハ淡黒微黄熟スレバ深紅色ニシテ榴花ノ如シ大サ七八寸ニ過ギス

（註）『本草綱目啓蒙』の鰕からの引用である。全くの引用を避けるためか、「ソノ腸、脳ニ属シ、」を『其腸腦ニ属シ』と書いている。

#### 第57号 糠海老（ぬかえび）

「糠海老」という名前からして小さなエビのようだ。

『長良川の生物』に「美濃市下流の緩漫な流れにはヌカエビが見られる。」とある。しかし、『日本淡水生物学』によると、ヌカエビは河和（知多半島）～村上（新潟県）の線以东および以北の本州に産するとある。ヌカエビと同じヌマエビ属に属するヌマエビは、本州以南の全土に分布するという。ここの「糠海老」は、ヌマエビの可能性が高い。

「糠海老」の解説のほとんどが、『本草綱目啓蒙』の「鰕」の項と同じである。大きさについては『本草綱目啓蒙』とは違って、「大サ七八寸ニ過ギス」とある。長良川に棲息するエビの中で一番大きなテナガエビでもこれほど大きくはない。実物を見ないで書いたのか、それとも記載の誤りではなかろうか。因みに、「鰕」とは「カハエビノ総名ナリ」と『本草綱目啓蒙』にある。

#### 第五拾八號

蝸蠃（ニナ、一名石ツボ）ハ濃飛両国各川溪湖池沼及溝瀆流水中ニ多シ長サ一寸許一方ハ尖リ一方ハ漸ク濶ク四分許ニシテ筆頭ノ形ノ如シ殻ハ田螺ヨリ厚クシテ薄厩アリ全ク黒色ナリ其肉ハ小蝸牛ノ如シ人之ヲ食セズ

（註）ほとんどが『本草綱目啓蒙』からの引用である。

厩という漢字であるが、「えん」と読む。意味は「ニナの貝の口を塞ぐ蓋」のことである。このように特殊な蓋の名前まで漢字があることは驚きである。

#### 第58号 蝸蠃（ニナ） 一名石ツボ（いしツボ）

「長サ一寸許一方ハ尖リ一方ハ漸ク濶ク四分許ニシテ筆頭ノ形ノ如シ」とある。カワニナのことだろう。

#### 第五拾九號

田蠃（タニシ、一名ツボ）ハ濃飛両国水田池沼泥中ニ生ズ形黄蝸（バイ）ニ似テ短シ一方ハ濶サ一寸許一方ハ漸ク尖リ長サ一寸餘殻薄クシテ蒼黒色肉ハ黒頭白身三四月腸中ニ三五子ヲ抱ス形全ク母ニ同ジクシテ小シ子長ズレバ母半殻ヲ出ル子母ニ随テ出泥中ニ蠢動ス春時賤民其肉ヲ食フ胡麻ト同食スルヲ忌ム

（註）ほとんどが『本草綱目啓蒙』からの引用である。

#### 第59号 田蠃（タニシ） 一名ツボ

「水田池沼泥中ニ生ズ形黄螺ニ似テ」とある。水田・池・沼の泥中ということなので、水田に一番一般的なマルタニシでよいだろう。タニシの解説は、ほぼ全文が『本草綱目啓蒙』からの引用である。その中に、「春時賤民其肉ヲ食フ胡麻ト同食スルヲ忌ム」の文がある。『本

草綱目啓蒙』の「禁ズ」が「忌ム」になっており、続く「芥子ト同食スレバ人ヲ殺スコト大和本草ニ見エタリ。」の文が削られている。その部分だけが改定されたり、削除されたのは、当時の岐阜県の民俗を正確に伝えるためなのだろうか。

#### 第六拾號

川蟹ハ濃飛両国ノ河邊鰲砌（イシガキ）、石籠（ジャコゴ）ノ間ニ穴居シ或ハ溪湖ニアリ一名ズガニト稱ス色ハ茶褐色ニシテ兩螯尤モ大ニ鉗ノ本ニ黒褐色ノ細毛多ク足ニモ亦毛アリ十月ノ頃上流ヨリ下リテ暖地ニ就ク甲ノ大サ徑三寸足ノ長サ三寸ヨリ四寸許性直行スルコト能ハズ横ニ走ルコト速カナリ八足アリ皆尖レル爪ヲ具フ殻ハ堅甲ニシテ脆シ時々蛻シテ新殻ニ換フ其眼ハ外ニ出鰕ノ如クニシテ堅シ此ヲ骨眼ト云フ雌雄ノ区別ハ石蟹ニ同ジ人之ヲ捕ヘテ食ス

（註）『本草綱目啓蒙』からの引用が多く、「石蟹」の解説と重複するところも多い。

#### 第60号 川蟹（かわがに） 一名ズガニ

「川蟹」の解説の多くは、『本草綱目啓蒙』のものを引用している。その解説の中に、「鉗ノ本ニ黒褐色ノ細毛多ク足ニモ亦毛アリ」とある。モクズガニのことである。

#### 第六拾壹號

川鰕ハ美濃国養老郡下池及揖斐川筋ニ産ス鼻尖リ鬚長ク背ニ斷筋アリ尾ニ硬骨アリ而シテ足數ハツアリ好テ躍ル其腸腦ニ属シ其子腹外ニアリ生ナルモノハ淡黒微黄熟スレバ深紅色ニシテ榴花ノ如シ大ナルモノ三寸ニ過キス

（註）『本草綱目啓蒙』から引用しており、「糠海老」の解説と重複するところが多い。「背ニ斷筋あり」は「背ニ斷節あり」の誤りである。「尾ニ硬骨あり」は「尾ニ硬キ甲アリ」が元の文である。

#### 第61号 川鰕（かわえび）

形態的には、『本草綱目啓蒙』の「鰕」の解説をほぼ引用している。そして、「鰕」については「カハエビノ総名ナリ。」と書かれていて、その中にはテナガエビも、ヌカエビも含まれている。そのためか、「糠海老」と「川鰕」の形態的な解説は大きさが違うだけで全く同じ引用文である。「川鰕」の解説文の終りには、「大ナルモノ三寸ニ過キズ」と書かれているが、県内に分布しているエビで三寸の大きさになるものはテナガエビ以外にはないだろう。しかし、第63号に「手長鰕」の項があるので困ってしまう。「川鰕」は何を指しているのだろうか。

『川村日本淡水生物学』には、「第2胸脚は雌では雄に比較して小さい」とある。はさみの小さいテナガエビの雌のことだろうか。

#### 第六拾貳號

馬糞貝（一名青貝）ハ濃飛両国各川及溝沼等ノ泥中ニ産ス色黒クシテ密ニ細キ横筋アリ形長橢圓ニシテ大ナルモノ長七八寸幅四五寸ニ至ル飛騨国ニテハ青貝ト稱シ土人取りテ食用ニ供ス

#### 第62号 馬糞貝（まぐそがい） 一名青貝（あおがい）

「川及溝沼等ノ泥中ニ産ス色黒クシテ密ニ細キ横筋アリ形長橢圓ニシテ大ナルモノ長七八寸幅四五寸ニ至ル」とある。この解説からだけでは、馬糞貝が何貝かは分からない。カラスガイの方言名に、「まぐそがい（関市）」がある。しかし、黒い貝はすべてカラスガイと呼ばれることが多く、種の断定は難しい。資料として使われている『本草綱目啓蒙』の中にも、美濃の方言名として「マグソガイ」の名が記載されている。量的な分布からすると、カラスガイよりもドブガイの可能性が高い。馬糞貝の名は、形に由来するものと思っていたところそうではなくて、臭いにあるようだ。「馬糞貝」の名は、『享保元文諸国産物帳』の中に出てくる。「まくそ貝（方県郡）」と記載されている。また、「青かい（安八郡・羽栗郡・本巣郡）」・「青貝（多芸郡・中嶋郡・加茂郡）」の記載もある。馬糞貝が、一名青貝と呼ばれるのもこれで理解できる。馬糞貝の名前の通り、臭いので味噌煮にして食べたようだ。それ故に、「みそかい（可児郡・土岐郡）」・「みそ貝（加茂郡・恵那郡）」の記載も、「馬糞貝」と同じ貝なのかもしれない。

「飛騨国ニテハ青貝ト稱シ土人取りテ食用ニ供ス」とある。この青貝は、カワシンジュガイのことであり、美味しいようで、近年まで食用にされたようである。

#### 第六拾三號

手長鰻ハ美濃国養老郡下池及揖斐川筋ニ産ス手頗ル長シ故ニ此名アリ其他ノ形状ハ総テ川鰻ニ異ナルコトナシ大ナルモノ三寸ニ過キス

#### 第63号 手長鰻（てながえび）

「手頗ル長シ故ニ此名アリ其他ノ形状ハ総テ川鰻ニ異ナルコトナシ」とある。第61号の川鰻で説明したように、手の長いこと以外は同じ形をしていることになる。また、「川鰻」と「手長鰻」の棲息場所も「養老郡下池及揖斐川筋」と同じである。「川鰻」はテナガエビの雌、体長

の1～1.7倍の長い手（第2胸脚）を持つ「手長鰻」はテナガエビの雄のことだろう。

#### 第六拾四號

ビンガ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ形チハ川ハゼ或ハカブ魚ニ似タリ鱗粗ニシテ且ツ鴈ノ羽様ノ斑紋ナシ色ハ淡黒ニシテ腹部ニ碗形様ノ鰭アリ常ニ石間ニ棲息ス尾尖丸ク味ヒ美ナリ漁季ハ春季ヨリ夏季ノ頃トス

#### 第64号 ビンガ魚（ビンガ）

「形チハ川ハゼ或ハカブ魚ニ似タリ・・・色ハ淡黒ニシテ腹部ニ碗形様ノ鰭アリ・・・」とあるが、大きさの記載がない。しかし、第44号チンチコ魚（一名 ロレコ）に、「形チビンガ魚ニ似テ小サク大ナルモノ一寸五六分ニ過キス・・・」とある。最初チンチコ魚はビンガ魚に似ていて小さく、大きくても一寸五六分位の大きさのようだと解釈していた。どうも違うようで、チンチコ魚はビンガ魚に形は似ているが小さく、大きくても一寸五六分と訳すべきのようだ。すると、ビンガ魚はチンチコ魚（ヨシノボリ類）よりも大きいということになる。方言名の「びんが」は、カジカ・カマキリ・チチブ・ヨシノボリ・カワヨシノボリに見られる。しかし、「腹部ニ碗形様ノ鰭アリ」とあることから、カジカ・カマキリではないことになる。そして、吸盤は持っているが、チチブの方言名である「びんが」は、郡上郡美並村粥川だけからしか採集されていない。狸々ビンガ・山鳥ビンガの基本名としての「ビンガ」は、分布は広くもっと一般的な魚種でなければならないように思う。チンチコ魚はカワヨシノボリ（体長7cm）を主とするものであり、このビンガ魚は大型のヨシノボリ類（10～11cm）のことではなかろうか。ならば、吸盤の件、体長の件も解決する。ここは大型のヨシノボリ類で良いだろう。しかし、元もとの方言名「びんが」は、カジカからヨシノボリ類までを含む、幅広い魚種に対する名称ではなかろうか。

#### 第六拾五號

鼈ハ濃飛両国各川流及池沼中ニ棲息ス形チ龜ニ類シテ四邊ニ肉裙アリ首龜ノ如クニシテ鼻端尖リ眼光爛々トシテ鋭ク力頗ル猛シ頸ハ甲ノ長サト同クシテ伸縮自在ナリ背ハ穹隆ニシテ横紋アリ四足共水掻アリ各三本ノ爪ヲ有ス春季ノ頃陸ニ出砂土ヲ掘テ印ヲ其中ニ埋ム其ノ形圓小ニシテ殆ド金柑ノ如シ夏秋ニ至リ化シテ小鼈トナル味ヒ最モ甘美滋養多シ磯ニアルモノハ底色黒シ沖ニアリテ底色黄ナルモノヲ上等トス又一種底色白クシテ黄色ナキモノアリ味ヒ至リテ佳ナリ多藝郡下池ニテ捕フルモノハ一貫

目以上ノ大ナルモノアリ

(註)『本草綱目啓蒙』から多くを引用している。「土ヲ掘テ印ヲ其中ニ埋ム」は、『卵ヲ其中ニ埋ム』の引用誤りである。

### 第65号 鼈(すっぽん)

スッポンで良いだろう。

#### 第六拾六號

金柑アジメ魚ハ美濃国郡上郡谷川筋ニ棲息スルモノニシテ其形チ恰モ麥稈鱈ノ如クナレドモ黒色ノ斑點細密ニシテ魚体ハ深黄色恰モ金柑ノ如シ故ニ金柑アジメノ稱アリ大ヒサニ三寸ヲ充分ノ極トス漁季ハ毎年夏季ヨリ秋季ノ候ニ在リ而シテ産卵ノ季モ秋季ニアリ味ヒ甘美ナリ

### 第66号 金柑アジメ魚(きんかんアジメ)

「形チ恰モ麥稈鱈ノ如クナレドモ黒色ノ斑點細密ニシテ魚体ハ深黄色恰モ金柑ノ如シ故ニ金柑アジメノ稱アリ・・・」とある。今でも、アジメドジョウを「きんかん(八幡町)・「きんかんあじめ(八幡町・美濃市)」と呼んでいる。金柑色はアジメドジョウの婚姻色である。秋には卵を持っているので、産卵も秋と考えられたようだ。

#### 第六拾七號

アンコ魚 椒魚ノ子ニシテ三寸以下ヲアンコトイフ無鱗魚即チ爬蟲ノ種族ニシテ美濃国武儀郡坂ノ東村字榎洞谷ニ産ス形チ殆トハサコニ似テ水中ノミナラズ稀ニハ陸ニ上リ深山落葉中ニ隠潜スルコトアリ頭ハ圓扁ニシテ口大ニ眼甚小ナリ背上皮色沙噺又鰕蝗ニ似テ黒斑アリ頭ニ近クシテ瘡廬(イボ)アリ椒樹皮ニ似タリ故ニサンシヤウウヲ・サンセウウヲノ稱アリ或ハ椒氣アル故ニ名ズクト云ヘリ肉鬣尾ニ連リ鰻魚又ハ鯰ニ似テ四足アリ足ハ扁ク前足ハ四指ニシテ手ノゴトシ後ハ五指ナリ土人多ク箆ヲ以テ捕獲シ或ハ焼キ或ハ生ニテ薬料ニ供スト

(註)沙噺はナマコのことであり、鰕蝗は「くそがえる(ツチガエル)」であると『本草綱目啓蒙』には書かれている。

### 第67号 アンコ魚(アンコ)

形態的な説明の多くは、オオサンショウウオとほとんど同じで、『本草綱目啓蒙』から引用している。アンコは、「椒魚ノ子ニシテ三寸以下ヲアンコトイフ」とあるように、ヒダサンショウウオ・ハコネサンショウウオ等の小型のサンショウウオを指す名前である。今でも、溪流に棲むサンショウウオ類の幼生を、大和町・白川町・

武儀町では「あんこ」と呼んでいる。アンコは、「美濃国武儀郡坂ノ東村字榎洞谷ニ産ス」という記録とも合う。また、「稀ニハ陸ニ上リ深山落葉中ニ隠潜スルコトアリ」からも、陸に上がるのは成体であり、「アンコ」は水中にいる幼生のことである。水中にいるから「箆ヲ以テ捕獲」するのである。

#### 第六拾八號

乞食ビンガハ濃飛両国各川ニ棲息ス形状ハ鬚ナキ小鯰ニ似テ色薄黒ク頭及口ハ大ヒナリ然レトモ尾端圓クシテ肉鱗尾ニ連ナラス總身多ク藍色ノ斑點アリ常ニ石間ニ潜ミ或ハ小石ノ上ヲ縦横走ルモノナレバ腹ノ正中ニ灰色ニシテ圓キ碗形ノモノアリコレハ石ニ吸ヒ付ク器ナリ大ナルモノ六七寸ニスギス油多ク甘味ナリ鱗ハ最モ細カキヲ以テ殆ド無鱗魚ノゴトシ

### 第68号 乞食ビンガ(こじきビンガ)

「形状ハ鬚ナキ小鯰ニ似テ色薄黒ク・・・總身多ク藍色ノ斑點アリ・・・」とある。この説明からチチブが思い浮かんでくる。

近年、チチブは4種に分けられている(川那部ほか,2001)。そのうち岐阜県の河川中流域まで分布するのはヌマチチブだけである。河口域、下流域にはチチブが分布する。チチブ(ヌマチチブ)に、「こじきびんが(関市小瀬)」の方言名がある(金古,1990a)。

#### 第六拾九號

砂クジリ魚(一名カナクジ)ハ濃飛各川流ニ棲息スルモノニシテ常ニ石間ニ潜ム形長ク頭大ニシテ方ニ口端尖レリ色薄茶色ニシテ多クノ細黒點アリ人捕フレバ小聲ヲ発シテ鳴ク大ナルモノ八九寸ニ及ブ味淡美ナリ毎年春季ヨリ夏季ノ頃最モ多ク捕フルモノトス

### 第69号 砂クジリ魚(すなクジリ) 一名カナクジ

「すなくじり(郡上郡・岐阜市・恵那郡・藤橋村)」・「かなくじ(美濃加茂市・関市・高富町・岐阜市・墨俣町・川島町・養老町)」は、カマツカの方名である。しかし、カマツカにしては生態の説明が変である。説明には、「各川流ニ棲息スルモノニシテ常ニ石間ニ潜ム」とある。カマツカは、石の間にいないこともないが、普通(常ニ)は砂のあるところで生活する。だから、「すなくじり」なのである。

#### 第七拾號

ドンコツ・・・解説なし

表1 ビンガの仲間の特徴

表記名	大きさ	吸盤	似ている種	模様・他	和名
カブ魚		なし	ビンガ	斑紋あり・黒茶～白茶	カジカ
ビンガ魚	チンチコより大	あり	川ハゼ・カブ	斑紋なし・淡黒	ヨシノボリ
チンチコ魚	1寸5・6分	あり	ビンガ	体色白茶色・赤茶の細点	カワヨシノボリ
猩々ビンガ魚	4・5寸		ビンガ	斑紋あり・体色赤黄色	カジカ
山鳥ビンガ					カジカ
乞食ビンガ	6・7寸	あり	小鯰	藍色の斑点	ヌマチチブ
ビンガハゼ魚	5・6寸		カブ	体色鼠青色	アユカケ
ドンコツ					ドンコ
川ハゼ魚	3・4寸	あり	ビンガ・カブ	白き斑点	ウキゴリ
ハゼ魚	4・5寸	あり	川ハゼ	体色淡褐色	マハゼ

## 第70号 ドンコツ

ドンコツについては、名称のみで解説がない。方言名の「どんこつ」は、カジカ・カマキリ・ドンコに見られる。その中で、一番広く使われているのがドンコの「どんこつ」である。美濃加茂市・笠松町・関市・岐阜市・穂積町・真正町・北方町・本巣町・糸貫町・谷汲村・揖斐川町・大野町・池田町・大垣市等と分布も広い。カジカ・カマキリの「どんこつ」は、形の似ているドンコから派生したものだろう。このドンコツは、ドンコでよいだろう。

## 第七拾壹號

猩々ビンガ魚ハ濃飛両国各川流ニ棲息スルモノニシテ常ニ石間ニ潜ミ形普通ノビンガ魚ニ異ナルコトナシト雖モ色澤即チ鷹羽ノ如キ斑紋ハ明瞭ニテ鰭尾ニ至ルマデ總テ薄キ赤黄色ヲ帯ブ故ニ猩々ノ稱アリ淡味ナリ大ナルモノ四五寸ニスギズ毎年春季ヨリ夏季ノ頃最も多ク捕フルモノトス

## 第71号 猩々ビンガ魚(しょうじょうビンガ)

ビンガの仲間は難しいので、集めて表1にしてみた。  
斑紋とは、「鷹羽ノ如キ斑紋」のことで、カジカに見られる斑紋のようだ。「形普通ノビンガ魚ニ異ナルコトナシ」とある。「異ナルコトナシ」とは、形はビンガ魚であるということである。しかし、大きさは4～5寸と大きい。胸鰭について明確には書かれていないが、ビンガ魚に似るということは吸盤を持つということなのだろうか(?)。「濃飛両国各川流ニ生息スル」と広く分布することからして、普通に見られる魚種でなければならない。吸盤等の疑問も残るが、猩々ビンガ魚の名前からして、赤色の強い体色をしていて、鷹羽模様のはっきりしているカジカではなかろうか。

## 第七拾貳號

蜆ハ濃飛両国各川流池沼中ニ生ズ大ナルモノハ六七分色

(注2 「美濃飛騨両国諸川棲息魚類取調書」の解説がなかった欄は魚名を書いた紙が貼られている状態で、書く予定がありながら未記入で終わってしまったという印象を受ける。

黒キアリ又黄ナルアリ黒キモノハ泥中ニアリ黄ナルモノハ砂中ニアリ味ヒ淡泊ナリ

## 第72号 蜆(しじみ)

「黒キモノハ泥中ニアリ黄ナルモノハ砂中ニアリ」は、『本草綱目啓蒙』から引かれたものであり、琵琶湖のシジミを解説した文である。岐阜県には、汽水に棲息するヤマトシジミと、淡水に棲息するマシジミがいる。マシジミの幼貝は黄緑色だが、成貝になると黒褐色から黒色になる。色だけでは、種の決めようがない。「濃飛両国各川流池沼中ニ・・・」と飛騨国にも生息することからして、淡水域に棲むマシジミではなかろうか。

## 第七拾參號

山鳥ビンガ・・・解説なし

## 第73号 山鳥ビンガ(やまどりビンガ)

解説が何も付いていない。解説の付いていないのは、27号縞鱈・第53号落鰻・第70号ドンコツとこの山鳥ビンガである。この4種には、何か共通した理由があるのだろうか。<sup>(注2)</sup>魚に興味のある者ならば、名前を聞いただけでどのような魚であるのかが、分かったのだろうか。「やまどりびんが」の名前は、カジカの方言名として残っている。美濃市・洞戸村・関市に「やまどりびんが」が、「やまどりびんが」の省略形「やまどり」が関市保戸島に残っている。方言名から考えて、「山鳥ビンガ」はカジカでないだろうか。

## 第七拾四號

刀貝ハ美濃国武儀郡長良川筋又ハ溝中等ニ産ス形刀ニ似テ細長ク尖キトガレリ故ニコノ稱アリ色黒ク堅ニ細キ密ナル絲目ノ條アリ大ナルモノ長サ二寸ニ過ギス土人捕テ食スルモ味美ナラズト云フ

## 第74号 刀貝(かたながい)

「形刀ニ似テ細長ク尖キトガレリ故ニコノ稱アリ」とある。さらに、「大ナルモノ長サニ寸ニ過ギス・・・」とある。『享保元文諸国産物帳』に、「かたな貝（池田郡）・「刀貝（武儀郡）」の記録がある。「刀貝」は「かたながい」と読んで正解のようである。また、形の説明からして「刀貝」はトンガリササノハガイだろう。「土人捕テ食スルモ味美ナラズト云フ」とある。『聞き書岐阜の食事（農文協）』の「南濃 輪中の食」の中に、「ドウビンの味噌あえ」と共に「ギシの煮物」が出てくる。「ギシ」は、「やや細長い二枚貝である」と書かれている。どうも、この「ぎし」がトンガリササノハガイのようである。<sup>注3</sup>

まとめ

- 1) 魚そのものも調査したのだろうが、土地の漁師に魚名の調査（結果的には方言名調査）もしたのだろう。それを『本草綱目啓蒙』を参考にしてまとめ上げたものが本書のようだ。そして、種名の同定だけでなく、文章の書き方そのものも『本草綱目啓蒙』を手本にしている。
- 2) 博物学的な調査書ではあるが、種の区別が判然としていなく、種の特定の難しいものが多い。・・・研究史的には、博物学的研究の最後の方に位置するものと言えよう。
- 3) 研究手法としては、土地の言葉（方言名）を手掛かりに、種の同定をしようとしている。そのため、方言名に振り回され、同じ種が何度も取り上げられている。
- 4) 一般の人たちにも分かることを目指して作られたもののようだ。そのためか、解説に使われた例が面白い。ここに整理して表2に示すことにする。

「似る」というのは、言葉通り大まかに似ているということであり、分類学的には全く関係がないようだ。「似る」に出てくる魚種は、鱈（3回）・ビンガ（3回）・鱒（3回）・カブ（3回）・魛（2回）・鯉（2回）・鯉（2回）・川ハゼ（2回）・牛魛・大口魚（海産魚のタラ）・ムツ魚・麥搗魚・嘉魚・白鱈・麥稈鱈・鮭・鮎・鰯等である。引用回数が多いものが、当時における形をイメージ出来た一般的な魚種なのだろうか。

カジカのカブが引用されていて、カジカよりも普通に見られるヨシノボリ類が出てこないはずがない。「64. ビンガ魚」は、ヨシノボリを主とした仲間（ヨシノボリ類）で良いのではなかろうか。

「異なることなし」とは、形がほぼ同じということらしい。色や大小、模様の有るなし等は別のようだ。引用された魚名には、「普通の」という形容詞の付いている場合が多い。婚姻色などの出ていないという意味だろう

表2

	記載名	似る種	異なることなし	その他
1	餅鯉	(白魚)		
2	ランチュウ魛	牛魛		
3	櫻鱈	魛魚		
4	鱈魚	大口魚(タラ)		
5	将言魛魚		普通ノ魛魚	
6	魛魚	ムツ魚		
7	柳鱈魚		普通ノ魛魚	
8	實鱈魚		普通ノ鱈	
9	砂ホリ魚	麥ツキ魚		
10	カナハチ魚			鮫魚ニ髣髴タリ
11	黄鱈魚	鮫魚		
12	鮫魚			
13	白魚	黒鯉		
14	老川魚	鱈		
15	ムツ魚	白鱈		
16	ギンコ魚	鱈魚(小サク)		
17	麥搗魚	鱈魚		
18	赤ムツ魚		普通ノムツ魚	
19	川鱈			
20	鱈魚			
21	黄鱈魚			
22	板鱈魚		普通鱈魚	
23	白鱈魚			
24	水龜			
25	育鱈		普通ノ鱈魚	
26	麥稈鱈		普通ノ鱈魚	
27	縞鱈			
28	緋鱈		普通ノ鱈魚	
29	アジメ魚	麥稈鱈		
30	泥鱈			小鱈鱈ノ如ク
31	鱒魚	鮭魚		
32	魛魚	川鯉		
33	鮫魚	鱒魚(小サク)		
34	嘉魚	鱒魚(小ク)		
35	錢龜			
36	田鯉	魛		
37	鮎魚	鯉魚		
38	川鯉	鱈		
39	ヌメリ魚	鮎魚		
40	鱈魚			蛇ノ如ク
41	緋鮎		普通ノ鮎	
42	鮭魚	鱒魚		
43	カブ魚	ビンガ魚		
44	チンチコ魚	ビンガ魚(小サク)		
45	鮎魚	嘉魚		
46	鮎			
47	ハゼ魚	川ハゼ		
48	鯉魚			
49	ハツ目鯉			普通鱈魚ニ同シ
50	胡麻鯉			普通鱈魚ト同ジ
51	針魚			
52	ビンガハゼ魚	カブ魚		
53	落鱈			
54	川ハゼ魚	ビンガ魚又ハカブ魚等		
55	ハザコ魚	鮎魚		
56	石蟹			
57	糠海老			
58	蛸屬			
59	田蟹	黄螺		
60	川蟹			
61	川鯉			
62	馬糞貝			
63	手長鯉		川鯉	
64	ビンガ魚	川ハゼ或ハカブ魚		
65	鼈			龜ニ類シテ
66	金柑アジメ魚			麥稈鱈ノ如クナレド
67	アンコ魚	殆トハサコ		
68	芝食ビンガ	小鮎		
69	砂クジリ魚			
70	ドンコツ			
71	狸々ビンガ魚		普通ノビンガ魚	
72	蛸			
73	山鳥ビンガ			
74	刀貝			

(注3 「美濃飛騨両国諸川棲息魚類取調書」には第75号として「タケチチコ」の名前が記載されている。解説文はない。

か。引用回数の順に並べてみると、鱒(3回)・鱒(2回)・鮎(2回)・ムツ魚・鮒・ビンガの順である。

・「その他」も含め合計してみると、鱒(5回)・鮎(4回)・ビンガ(4回)・鱒(3回)・鮎(3回)・鰻(3回)・カブ(3回)・鱒(3回)・・・の順になる。この辺りが、当時のイメージできる川に住む一般的な魚種なのだろう。

逆に、引用例の付いていない魚種は、鮎魚・川鱒・鱒魚・黄鱒魚・板鱒魚・鮎・針魚・砂クジリ魚である。ナマズ・アユは誰もが知っている魚種であり、引用魚種の必要がなかったのだろう。クルマサヨリ・タナゴ類・ハリヨについては、形が特殊過ぎて適当な引用魚種が思い浮かばなかったのではなかろうか。砂クジリ魚がカマツカであるならば、「9砂ホリ魚」と同じである。ならば「9砂ホリ魚」と同じく、「麥ツキ魚」を例に持ってくるべきなのだが、形も違うのであろうか。

#### 4. 表記について

同じ種に対し重複し紹介解説している。別種だと考えていたものか、それとも別の理由があるのだろうか。この「調査書」は、『本草綱目啓蒙』を手本にして作られている。そのため、『本草綱目啓蒙』に記載されている種と同じものは、解説のほとんどが『本草綱目啓蒙』からの直接的な引用であったりする。記載のないもの場合には、書き方を真似て書かれている。

#### カワヒガイ(3櫻鱒・5将言鮎魚)

「さくらばえ」は、土岐川・木曾川・長良川・根尾川・揖斐川の平野部で広く使われている。カワヒガイの方言名としては、一番一般的な方言名と言える。それに対して「しょうげんもろこ」は、揖斐川町辺りでだけ使われている。「5将言鮎魚」の解説を読むと、「大ナルモノ三四寸ニ過キス」とあるのみで、婚姻色や「櫻鱒」については全く触れていない。別種と考えていたのではなかろうか。

#### アブラハヤ(タカハヤを含む。)(8糞鱒魚・39ヌメリ魚)

「くそばえ」は、郡上郡白鳥町・八幡町・和良村、益田郡金山町・下呂町、加茂郡東白川村・白川町・八百津町、恵那郡加子母村、美濃加茂市で使われている。「ぬめり」は、美濃市美濃町、関市保戸島、本巣郡真正町で使われている。「ぬめり」に似た「ぬめ」は、山県郡高富町、本巣郡真正町・北方町、揖斐郡揖斐川町・池田暢・大野町、本巣郡巢南町、安八郡神戸町、不破郡関ヶ原町で使われている。「くそばえ」と「ぬめり」・「ぬ

め」は、使われている地域が別である。説明文を読んでも、別種のように考えていたようだ。

#### ネコギギ(10カナハチ魚・11黄類魚)

「11黄類魚」は、『本草綱目啓蒙』に出ており、解説のほとんどがこの本からの引用である。解説中の「赤ギギウ」は、『本草綱目啓蒙』の中に記載されており、岐阜の方言名ではないかもしれない。当然、「黒ギギウ」も疑われる。両方共、県内ではまだ採集されていない。「黒ネギ・赤ネギ・川蜂」は、岐阜の方言名の可能性が高い。「かなはち」は、岐阜県で使われていた方言名のようにだが、今はどこでいつ頃まで使われていたのか不明である。「11黄類魚」には、アカザも含まれていて、種名というよりギギ科の総称のようなところがある。お手本の『本草綱目啓蒙』に書かれている「黄類魚」と岐阜で「かなはち」と呼ばれる魚が、同じ種かどうか分からなかったのではなかろうか。

#### オイカワ(14老川魚・23白鱒魚)

「14老川魚」の後に(白黄鱒變ジテ老川トナル)と書かれている。「23白鱒魚」に「春季ニ至リ變シテ美麗ナル老川トナル」とある。「老川」と「白鱒」は同じ種であることを知っている。しかし、この変化が繁殖期を迎えての婚姻色とは認識してはいなかったようだ。一般人の間では、別種として別々のように呼ばれていたので、「老川魚」「白鱒魚」の2項目を起こしたのだろう。今日でも、別種のように呼ばれることが多い。

#### カワムツ(15ムツ魚・18赤ムツ魚)

「18赤ムツ魚」に「普通ノムツ魚ニ異ナルコトナシト雖モ色少シク濃ヤカナリ・・・」とある。同じ種とまでは認識していないように思える。別種と考えて二項目を起こしたのだろう。

#### スゴモロコ属(7柳鮎魚・17麥搗魚)

「6鮎魚」にモロコとルビが振られていることから、「7柳鮎魚」を「やなぎもろこ」と読むことにした。「鱒」にハへのルビが振られており、モロコとハエは使用される漢字で区別されているようだ。ここは表3のように、一応「やなぎばえ」の可能性についても調べることにした。「17麥搗魚」の読みも、一番方言分布の広い「むぎつき」を採用することにした。「7柳鮎魚」の解説に、「濃青色ニテ鷹羽ノ如キ斑紋あり・・・」とある。また、「17麥搗魚」には、「腹部ヨリ尾ニ至ル迄黒キ横線アリ・・・」とある。見ようによっては見えないこともな

表3 ヤナギバエ、ムギツキに関する方言と魚種

種名	やなぎばえ	やなぎもろこ	むぎつき	むぎつく
アブラハヤ	加子母村・東白川村・武芸川町			
スゴモロコ属※ (イトモロコ、 コウライモロコ、 デメモロコ)	八幡町	高富町	美濃加茂市・川島町・笠松町・白川町・七宗町・川辺町・美濃市・関市・岐阜市長良・墨俣町 養老町	岐阜市 養老町 美濃地方
ゼゼラ ヒガイ モツコ		養老町		

※イトモロコ、デメモロコ、コウライモロコの方名で集められたもの。3種が混ざっている可能性が高いのでスゴモロコ属とした。

いが、スゴモロコ属では弱いように思える。かと言って、ピタリ当てはまる種もないのが本当のところである。方言名をもとに、スゴモロコ属とした。

### シマドジョウ (26麥稈鱮・27縞鱮・29アジメ魚)

「26麥稈鱮」の解説に「腹部ハ総テ金黄色ヲ帯フ毎年四五月ノ頃ヨリ粟粒ノ如キ卵ヲ胎シ・・・」とある。良く熟した麦のような美しい黄金色をしているので「麥稈鱮」と呼ばれるのである。黄金色は婚姻色である。シマドジョウの産卵期は5月下旬～7・8月である。「27縞鱮」は、『本草項目啓蒙』に名前を出てくるが解説は詳しくない。また、岐阜県内の方言名「しまどじょう」は、国府町・池田町と分布も狭い。「むぎからどじょう」は美濃加茂市・清見村・萩原町・下呂町・金山町・和良村・白川町・加子母村・美並村・洞戸村・岐阜市・根尾村・糸貫町・巣南町・谷汲村・大野町・揖斐川町・大垣市と広い地域で使われている。方言名からすると、シマドジョウの中では、「むぎからどじょう」は主役である。「縞鱮」に解説がないのは、次の「29アジメ魚」と絡んで、「縞鱮」が何であるか自信が持てなかったのだろう。

「29アジメ魚」の解説を読むと、「形状色澤斑紋等ハ殆ト麥稈鱮ニ似テ体少シク瘦セ・・・毎年四五月頃胎卵ス・・・」とある。形態的にはアジメドジョウであるが、「四五月頃胎卵ス」というのはおかしい。アジメドジョウは、「秋に伏流水中に潜入して越冬し、翌年の春にそこで産卵する」とある(川那部・水野,1989)。「四五月頃胎卵ス」は、シマドジョウのことであろう。「29アジメ魚」は、アジメドジョウとシマドジョウが混乱しているようだ。

「66金柑アジメ魚」には、「産卵ノ季モ秋季ニアリ・・・」とあり、正しくアジメドジョウの解説がなされている。秋には大きな卵を持っているため、産卵も秋に行われるものと考えたのだろう。「金柑アジメ魚」の名前は、婚姻色の濃くなったアジメドジョウを呼んだも

のである。

### フナ (37鮒魚・41緋鮒)、ドジョウ (28緋鱮・30泥鱮)

「緋鮒」・「緋鱮」共に『本草綱目啓蒙』に出てくる。珍しいものを好む当時の風潮が良く出ている。「岐阜県にも棲息しているぞ」ぐらいのことだろう。「鮒魚」・「泥鱮」の解説は、ほとんどが『本草綱目啓蒙』からの引用である。

### コイ (1緋鯉・48鯉魚)

「1緋鯉・48鯉魚」の解説の中で、「年々他國へ輸送シ巨額ノ収益ヲ得・・・」とある。岐阜県としては、流通に乗り収益のあった経済的に重要な魚種だったのでろう。野生のものではなく養殖のコイについてだけ解説している。

### ウナギ (40鰻魚・50胡麻鰻・53落鰻)

「40鰻魚・50胡麻鰻」の解説は、『本草綱目啓蒙』からの引用である。『本草綱目啓蒙』の解説には、オオウナギの説明の後、「京師ニモ常ニウナギノ大サニシテ、白点アルモノアリ。ゴマウナギトヨブ。油多ク、味美ナリ。濃州ニモ多シト云。」とある。「50胡麻鰻」は、この文章を受けて書かれているのではなかろうか。ただ、「白点」が「黒点」に変わっている。大きさについては、オオウナギほどではなく「大イナルモノニテ二尺内外トス。」とあり、普通よりも少し大きいだけである。

「落鰻」については、渋澤(1958)の『日本魚名集覧』にも出て来ない。当時は、ウナギが深海で産卵し、生まれた稚魚が海から登って来ることを知らなかった。『和漢三才図会』には、「四、五月に子を生むが、織くて長さ三、四寸で針のようである。これを針鰻鱺という。漸く成長すると川上に行く。」とある。ウナギには、卵も見つからないし、産卵をするのも見られていない。そのため、「山芋変じてウナギとなる」という伝承が生まれることになったのである。この「落鰻」の記録は凄くことであるが、当時の知識としては解説の仕様がなかったのだろう。

### カマツカ (9砂ホリ魚・69砂クジリ魚)

「9砂ホリ魚」の名は、『本草綱目啓蒙』に「鯊魚(ハゼ)」の仲間として書かれている。「すなほり」は高富町で採集されているが、岐阜県内の方言名分布は狭そうである。それに対して、「69砂クジリ魚」は分布も郡上郡・岐阜市茜部・恵那郡・藤橋村と広い。「すなくじり」から生まれたと思われる「すなくじ」は、もっと広い。

恵那市東野・八百津町・可児市・御嵩町・美濃加茂市・各務原市・川島町・笠松町・和良村・金山町・川辺町・白川町・高鷲村・八幡町・関市小瀬・高富町・伊自良村・岐阜市長良・海津町・本巣町・真正町・北方町・池田町・大野町・久瀬村・養老町・上石津町・神戸町等である。同一種か分からぬまま、『本草綱目啓蒙』に記載のある「すなほり」と岐阜県に広く分布する「すなくじり」を記載したのではなかろうか。

「砂ホリ魚」は、「大ナルモノ二三寸ニ過キス」とあり、カマツカにしては少し小さいことが気になる。

#### カジカ (43カブ魚・64ビンガ魚 (?)・71猩々ヒンガ魚・73山鳥ビンガ)

カジカの基本的な名称は、「かぶ」と「びんが」である。この二つの名は方言名として今でも残っており、美濃市と美並村の間を境にして、長良川の上下に分布している。しかし、「びんが」は先にも書いたように、カジカ・アユカケ・ヨシノボリ・カワヨシノボリ等の総称名のようなのだ。「猩々ヒンガ魚」・「山鳥ビンガ」は、「ビンガ魚」の中を更に細かく分けた名称だろう。

「山鳥ヒンガ魚」は、解説はないが方言名からしてカジカで良いだろう。「猩々ヒンガ魚」は赤みの強いカジカのようなのだ。方言名の「びんが」が総称名であることが、幾つもの項目の書かれた原因のようなのだ。

#### ヨシノボリ類 (44チンチコ魚・64ビンガ魚)

先に書いたように、「チンチコ魚」は大きさと分布(方言名の分布は本巣郡・揖斐郡)からしてカワヨシノボリを主にしたものの名称であり、「ビンガ魚」は方言名が美濃市より下流に分布することとチンチコ魚より体長が大きいことからヨシノボリを主としたものの名称だろう。もちろん、ヨシノボリとカワヨシノボリとは、明確には区別されてはいない。

### 5. 美濃国・飛騨国の分布について

この調査書が書かれた1881(明治14)年には、ダムもなく、アユなどの放流事業も行われてはいなかった。その当時の飛騨の様子を知るために、『飛州誌(1829)』・『斐太後風土記(1874)』を使って当時の分布を表4のようにまとめた。

『飛州誌』は、『享保元文諸国産物帳』を元にして書かれたと言われている。『享保元文諸国産物帳』も『斐太後風土記』も、産物について書かれている。逆に言うと、産物でないものについては、書かれていないことになる。その目でこの資料を見なければならぬ。

表4 飛騨に分布すると記載されている種

	飛州誌(1829)	斐太後風土記(1874)	
		宮川水系	益田川水系
サケ	鱒	サケ	
サクラマス	鮭	マス(鱒)	
ヤマメ	アメマス	ハエ(鱒)	
サツキマス	アマゴ		マス(鱒)
			アマゴマス(鱒)
アマゴ	シマ		ハエ(鱒)
			アマゴハエ(鱒)
イワナ	イハナ、ソウタケ、ヤマタケ	イワナ	イワナ
スナヤツメ	鱒魚	ヤツメ	
アユ	香魚	アユ	アユ
ウグイ	鯉	ウグイ	ウグイ
フナ	鮒	フナ	
ドジョウ	泥鰌	ドジョウ	
アジメドジョウ	アジメ	アジメ	アジメ
アブラハヤ	アブラメ		
カジカ	チチカブ	チチカブ	ザコ(?)
ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ
アカザ	ザス	ザス	ザス
ナマス			ナマス
オйкаワ	アカモト		アカモト
カワムツ			ムツハエ
ニゴイ			カワコイ
カマツカ			ナナセハシリ
ヨシノボリ類	ゴリン	チチコ・ゴリ・チリンコ	チチコ

#### (1) 美濃国飛騨国の両国に分布記載のある種

表5のようになる。表中の分布は、明治初期当時を推測して作ったものである。また、「南飛騨」とは太平洋側の益田川流域、「北飛騨」とは日本海側の主に宮川・高原川流域を指す。

#### (a) 記載と実際の分布が一致すると思えるもの

アカザ(11黄鰮魚)、シマドジョウ(29アジメ魚)、ドジョウ(28緋鱒・30泥鰌)、ウグイ(32鯰魚)、イワナ(34嘉魚)、ウナギ(40鰻魚)、カジカ(43カブ魚・71猩々ビンガ魚)、カワヨシノボリ類(44チンチコ魚)、スナヤツメ(49八ツ目魚)の合計9種である。

ドジョウとスナヤツメは、『岐阜県の動物』の益田川調査報告に出てくる。先に記したように、食べなかった魚種は産物として扱われず、記録としても残らないことになる。郡上郡高鷲村でも、「くそんぼ(アブラハヤ・タカハヤ)」・「どじょう」は全く食べられることはなかったという。「くそんぼには毒があるように思っていた。」と話す人もいる。美味しい魚が多く棲息していれば、ドジョウ・スナヤツメ等を食べる必要もなかっただろう。

ダムが造られたからといって放流される魚種でもないもので、昔から居たものとするにことにした。「28緋鱒」であるが、「美濃国加茂郡和知村、飛騨国大野郡大名田村」に産するとあること、ドジョウには色かわりがよく生まれるようなので両国に分布する項に含めた。オйкаワの△印も同じく棲息を推定したものである。

表5 美濃国飛騨国の両国に分布記載のある種

	記載名	種名	美濃国	南飛騨	北飛騨
6	魮魚	タモロコ	○		
9	砂ホリ魚	カマツカ	○	○	
10	カナハチ魚	ネコギギ	○	△	
11	黄鰐魚	ネコギギ	○	△	
		アカザ	○	○	○
12	鯰魚	ナマズ	○	○	
13	白魚	ニゴイ	○	○	
14	老川魚	オイカワ	○	○	△
15	ムツ魚	カワムツ	○	○	
18	赤ムツ魚	カワムツ	○	○	
20	鱒魚	ヤリダナゴ	○		
21	黄鱒魚	アブラボテ	○		
22	板鱒魚	イタセンバラ	○		
23	白鱒魚	オイカワ	○	○	△
28	緋鱒	ドジョウ	○		○
29	アジメ魚	シマドジョウ?	○	△	△
30	泥鱒	ドジョウ	○	△	△
31	鱒魚	サクラマス			●
		サツキマス	○	●	
		ウグイ	○	○	○
32	鰻魚	イワナ	○	○	○
34	嘉魚	ウシモツゴ	○		
36	田鯉	ウナギ	○	○	○
40	鰻魚	カジカ	○	○	○
43	カブ魚	カワヨシノボリ類	○	○	○
44	チンチコ魚	アマゴ	○	○	○
45	鯰魚	スナヤツメ	○	△	○
49	ハツ目鰻	ウキゴリ	○		
54	川ハゼ魚	ウキゴリ	○		
64	ビンガ魚	チチブ	○		
68	乞食ビンガ魚	カマツカ	○	○	
69	砂クジリ魚	カマツカ	○	○	
71	狸タビンガ魚	カジカ	○	○	○

註) ○印は、現在も生息するもの。

●印は、当時は生息したが現在は棲息しないもの。

△印は、当時の生息が推定されるもの。

『飛州誌』に出てくる「アカモト」を、単純に今までカワムツとしてきたが違ったようである。「あかもと」という方言名は、オイカワとカワムツの両方にある。カワムツの「あかもと」は、朝日村・久々野町・下呂町・白川町・東白川村・加子母村・上矢作町・白鳥町・八幡町に分布する。オイカワの「あかもと」は、朝日村・萩原町・下呂町・金山町・大和町にと、やや狭いが益田川流域には同じような分布をする。『斐太後風土記』では、「あかもと」と「むつばえ」は、しっかり区別され使われている。「むつばえ」は、カワムツとしか考えられないことから、区別され使われている「あかもと」はオイカワということになる。北飛騨でのカワムツの棲息がはっきりしないこと。アユ放流前の北飛騨には、わずかながらオイカワが棲息していたらしいこと等を考えたとき、『飛州誌』の「アカモト」は南飛騨のオイカワのことを言っているのではなかろうか。

#### (b) 北飛騨には分布せず、南飛騨(益田川流域)にしか分布しないもの

カマツカ(9砂ホリ魚・69砂クジリ魚)、ネコギギ(10カナハチ魚・11黄鰐魚)、ナマズ(12鯰魚)、ニゴイ

(13白魚)、カワムツ(15ムツ魚・18赤ムツ魚)、サツキマス(31鱒魚)、アマゴ(45鯰魚)の7種である

カマツカ・ネコギギ・ナマズ・ニゴイ・カワムツ・アマゴの6種は、美濃国・飛騨国ともに分布していたことになる。そのことは、北飛騨には分布しないが、南飛騨には分布していたことを知っていて書かれたのだろうか？。

『国府村史』によると、大正以降アユの放流に伴って棲息し始めたものとして、カマツカ・カワムツ・オイカワが記録されている。『河合村誌』には、移入種としてヒガイ・ニゴイ・ハス・ナマズの名がある。ニゴイについては、1923(大正12)年に当時の漁業組合長が古川町近辺に放流したものが増殖して今日にいたっているとある。オイカワについては、以前より少数はいたようだが、1941~1942(昭和16~17)年頃国府町の金子氏が20匹移殖放流したとある。『岐阜県の動物』に、ナマズは宮川にまれに見られるが、1887(明治20)年頃、当時の古川町長が富山から購入したものを、かごのまま宮川へ落として逃げられたものが定着したのではと書かれている。

アマゴは日本海側には分布しないが、庄川水系の尾上郷川の上流アマゴ谷谷だけには昔から棲息するといわれている。太平洋側から峠越しに移入されたものと考えられるが、北飛騨にも分布することになる。しかし、この調査書は宮川・高原川が主であり、庄川はよく調べられていない。それで、北飛騨にはアマゴは分布しないとしたのだろう。

ネコギギであるが、益田川の支流馬瀬川(金山町)に棲息記録がある(岐阜県高等学校生物教育研究会,1974)。ネコギギは、愛知県豊川から三重県五十鈴川までの伊勢湾に注ぐ川に分布する種であり、アユの放流によって移動するものではない。それで、明治の初めの頃にも生息したかもしれないと考え、△印を付けることにした。

アユは、ダム建設により今は遡上できなくなっている。昔は、下原郷中切村(現 下呂市金山町中切)の上釜滝・下釜滝辺りまで遡上したようである。サツキマスは小坂町よりも上流の無数河辺りまで遡上したようである。

『魚類取調書』には、「31鱒魚」が美濃国・飛騨国の両国に分布するとある。アマゴの大きなもの、ヤマメの大きなもの、ニジマスの大きなもの等は、一般には区別せずすべて「ます」と呼ばれている。『飛州誌』には、「鱒」の記載とともに、「アメマス」とルビが振られている。「アメマス」の「アメ」は、「アメノウオ」の「アメ」だろうと思っている。「アメマス」は、『斐太後風土記』に出てくる「アマゴマス」と同じものであり、益田川のサツキマスのことではなかろうか。そして、「鱒」はサ

クラマスのことである。ならば、『魚類取調書』は「鯪魚（ヤマメ）」と「鯪魚（アマゴ）」を区別していることから、「31鯪魚」はサクラムス・サツキマスの両方を含んでいるものと考えてはどうだろう。当時サツキマスは、小坂町よりも上流の無数河辺りまで遡上したようである。今は、ダムが造られ全く姿は見られなくなってしまった。

### (c) 北飛騨だけに分布するもの

サクラムス（31鯪魚）である。

ヤマメとアマゴの違いについてははっきりと認識していて、ヤマメは飛騨国に、アマゴは飛騨国（益田川）・美濃国に分布すると書かれている。先に記したように、サクラムス・サツキマスは一まとめに「鯪魚」と表記され、美濃国・飛騨国の両方に分布すると書かれている。しかし、『斐太後風土記』を分析して書かれた秋道智彌の論文（1979）によると、益田川の「鯪」には「アマゴマス」の読みがふってあり、「鯪が三年をへて鯪に成也。」とある。さらに、この「鯪」には、「アマゴハエ」という読みがつけられているという。つまり、サツキマスとサクラムスの違いを正確に認識していたと推測している。サクラムスは、高山よりも上流の川上川まで遡上したようだ。サツキマスも今では益田川に見られなくなってしまった。

### (d) 飛騨国には分布しないもの

タモロコ（6 鮎魚）、ヤリタナゴ（20 鱒魚）、アブラボテ（黄鱒魚）、イタセンパラ（22板鱒魚）、ウシモツゴ（36田鯉）、ウキゴリ（54川ハゼ魚）、ヨシノボリ（64ビンガ魚）、チチブ（68乞食ビンガ）の8種が両国に分布すると記載されている。

『岐阜県の動物』によると、タモロコ（赤川・黒川・白川）・ヤリタナゴ（黒川）・ヨシノボリ（川辺）は飛騨川の下流でないと見られないようだ。他の魚種は飛騨川でも見るができない。記載の誤りなのだろうか。それとも、同定誤りなのだろうか。

## (2) 美濃国だけに分布記載のあるもの

美濃国だけに分布記載のあるものを、表6に示した。

### (a) 記載と実際の分布が一致しているもの。

カワバタモロコ（2ランチュウ魍）、カワヒガイ（3櫻鱒魚・5将言魍魚）、スズキ（4鱸魚）、スゴモロコ属（7柳魍魚・17麥搗魚）、メダカ（16ギンコ魚）、クルマセヨリ（19川鱻）、ボラ（38川鯿）、マハゼ（47ハゼ魚）、

ハリヨ（51針魚）、アユカケ（52ビンガハゼ魚）、ウキゴリ（54川ハゼ魚）の11種である。淡水魚を生活環で分けると、一生を淡水域のみで生活する純淡水魚・海と川の間を行き来する回遊魚・本来は海産魚であるが、生活環の一部で汽水域または淡水域に入る周縁魚になる。記載種の中、アユカケ・ウキゴリが回遊魚、ボラ・スズキ・クルマセヨリ・マハゼが周縁魚である。これらの6魚種は海と関わりの深い種であり、川の中下流域に生息する種ということになる。海からは遠く、標高の高い飛騨に棲息していなくても当然かもしれない。

カワバタモロコは、「湖沼の沿岸部やため池に多く、溝川や用水路にも入る。」と川那部水野（1989）にある。スゴモロコ属・メダカも平地に生息する魚種である。ハリヨも平野部の湧水のある場所を好む。

カワヒガイはアユの放流とともに飛騨に入ったようで、現在は生息している。しかし、明治の初め頃には分布してはいなかっただろうと思われる。

表6 美濃国だけに分布記載のあるもの

記載名	種名	美濃国	南飛騨	北飛騨
2	ランチュウ魍	カワバタモロコ	○	
3	櫻鱒	カワヒガイ	○	
4	鱸魚	スズキ	○	
5	将言魍魚	カワヒガイ	○	
7	柳魍魚	スゴモロコ属	○	
8	箕鱒魚	アブラハヤ・タカハヤ	○	○
16	ギンコ魚	メダカ	○	
17	麥搗魚	スゴモロコ属	○	
19	川鱻	クルマセヨリ	○	
25	育鱒	(ホトケドジョウ)	○	
26	麥稗鱒	シマドジョウ	○	
37	鮎魚	フナ	○	○
38	川鯿	ボラ	○	
39	ヌメリ魚	アブラハヤ・タカハヤ	○	○
41	緋鮎	フナ	○	
46	鮎	アユ	●	●
47	ハゼ魚	マハゼ	○	
51	針魚	ハリヨ	○	
52	ビンガハゼ魚	アユカケ	○	
66	金柑アジメ魚	アジメドジョウ	○	○

### (b) 記載とは違って、飛騨国にも分布していたもの。

アブラハヤ（8黄鱒魚・39ヌメリ魚）、シマドジョウ（26麥稗鱒）、フナ（37鮎魚）、アユ（46鮎）、アジメドジョウ（66金柑アジメ魚）の5種である。

アユは、ダムにより遡上できず、今は放流によって維持されている。しかし、ダムの出来る前の宮川では、高山市辺りまで遡上していたようである。『斐太後風土記』に、「宮川へ年魚（アユ）の登ることは、年によりて多少有、・・・。豊年には最数多登て、俗に豊年魚と云ふ。高山町の橋々より上までも登ることあれど、其は稀なることにて、・・・。」とある。益田川も「・・・年魚ニ釜滝まで上流には稀也。」とある。庄川も鳩ヶ谷辺りまでは登ったと言う。

アブラハヤ・タカハヤは、元から居たようだが、個体数は少なく、地元の人たちは「食べるとシラミがわく」と言って食用とはしなかったという。産物ではなかったようで、記録には残らなかったようだ。

アジメドジョウは美味しかったようで、『斐太後風土記』に総生産高1119.9kgの記録(秋道,1979)が残っている。宮川・高原川・益田川での生産記録である。美味しいアジメドジョウがこれだけ獲れれば、シマドジョウは記録に残らないだろう。フナも『斐太後風土記』の宮川に記載がある。

### (3) 飛騨国だけに分布記載のあるもの

ヤマメ(33鮭魚)、サケ(42鮭魚)の2種である。サケは、ダムが造られたことにより遡上できず今は見られなくなっている。ヤマメは今も生息している。しかし、アマゴの放流による交雑が進みつつあることが心配される。

## 6. 棲息環境・その他について

解説は『本草綱目啓蒙』を下敷にして書かれているのだが、棲息環境については「川流ニ棲ム」・「川ニ棲ム」・「川筋ニ棲ム」と微妙に書き分けている。これらを整理したものが次の表7である。

この表を見てみると、「川流ニ棲ム」に属する魚種はオイカワ・カワムツ・ヤマメ・アマゴ・カジカ・ヨシノボリ等の川でも流れの速いところに棲むものたちである。流れの速いところに棲むことを、「川流ニ棲ム」と言い表したもののようだ。すると、「10カナハチ魚」のネコギギと「36田鯉」のウシモツゴは、速い流れの中に棲んでいることになる。「田鯉」は、「川流及池沼溝中ニ産ス」とある。「川流」と同時に「池沼溝中ニ産ス」の記載あるものは、「田鯉」だけである。「田鯉」は、ウシモツゴではないのだろうか。美濃飛騨両国に棲むと書かれていることから一層心配になる。「カナハチ魚」のネコギギも、深い淵には居るが流れの強い本流では見ることがないので不思議に思える。

「川ニ棲ム」と表現される魚種の多くは、「池・沼・溝」等にも棲むようだ。同じ川でも、「川流」に比べると比較的流れの緩い河川環境のようだ。

「川筋ニ棲ム」と表現されているものは、具体的に棲息場所の分かっているものに使われている。木曾川・長良川・揖斐川等の河川名或は具体的な生息場所が書かれている。「61川鰻」と「63手長鰻」は、形態的な解説が似ているだけでなく、生息場所(養老郡下池及揖斐川筋)も同じである。テナガエビの雌雄と考えて良いだろ

う。

## 7. 分布の広さについて

記載をよく読んでみると、分布の広いもの・狭いものが分かってくる。それを表8にまとめた。

分布の一番広いものは、「濃飛両国各(諸)川ニ棲息ス」と表現されるものである。そこに書かれているウグイ・オイカワ・カワムツ・ニゴイ・ナマズ・ドジョウ・カマツカ・カジカ・ヨシノボリ類・アマゴ・イワナ等の魚種は、ナマズ以外は郡上で普通に見られる魚種である。それらの他に、飛騨に棲息していないと思われる「20鯉魚(ヤリタナゴ)・21黄鯉魚(アブラボテ)・22板鯉魚(イタセンパラ)」が含まれている。当時の美濃平野にはタナゴ類が、豊富に生息していたのだろう。さらに、「6鮎魚(タモロコ)・36田鯉(ウシモツゴ)」も含まれている。素直に読まねばならぬと思いながらも、美濃平野に普通に多く見られたため、飛騨地方にも棲息するものとしたのでは・・・?と考えたくなくなってくる。

次に分布の広いのは、「美濃国各川ニ棲息ス」と表記されるものである。「8糞鯉魚(アブラハヤ)・37鮎魚(フナ)・46鮎(アユ)」の3種類である。「8糞鯉魚」は、方言名「くそばえ」の分布から判断されたのであろう。「くそばえ」は、郡上郡白鳥町・八幡町・和良村、加茂郡白川町・東白川村・八百津町、美濃加茂市、恵那郡加子母村と益田郡下呂町・金山町に分布している。『享保元文諸国産物帳(1738頃)』・『斐太後風土記(1876)』には、「あぶらめ」の名前しか出てこない。方言名の「くそばえ」が益田郡下呂町・金山町に入ったのは、交通機関の発達した最近のことではないだろうか。「8糞鯉魚」の具体的な分布として、「美濃国長良揖斐川諸川流ニ棲息」と書かれている。「37鮎魚」が飛騨に分布していないと考えられたことは理解できるが、「46鮎」はどうしてなのだろう。古くから名産品として名高かった岐阜の鮎に比べて、飛騨の鮎は未発達な流通により商品価値は低く、影の薄い存在だったからだろうか。

具体的な分布地の書かれているものがある。「1鮎鯉・48鯉魚(コイ)」は、恵那郡で育養されていると書かれている。『岐阜県史』には、1870(明治3)年恵那郡で水田を利用した養鯉の実施されたことが書かれている。明治になって色々の新しい産業が興されることになった。その一つが、恵那郡の養蚕・蚕糸業であり、カイコの蛹による養鯉であったようだ。殖産興業政策に乗って実施されたものである。輸送の難しい飛騨の鮎と同様、安定供給できない野生鯉は、商品としては無視されたのだろうか。『岐阜県史』の美濃・飛騨主要物産一覧表の

表7 生息環境について

	記載名	川流	川	川筋	池・沼	田・溝	その他
1.	鯉						育養・恵那郡
2.	ランチュウ			揖斐川	○		西濃地方
3.	櫻鱒			長良・揖斐川			
4.	鱸魚			長良川			本巢郡・河鱸
5.	将言鮎魚			揖斐川			大野郡
6.	鮎魚	○					
7.	柳鮎魚			長良・揖斐川			
8.	糞鱒魚	○					
9.	砂ホリ魚	○					砂底ニ潜行スル
10.	カナハチ魚	○					
11.	黄鰻魚		○				砌石ノ間ニ棲ム
12.	鯰魚		○		○		
13.	白魚		○				
14.	老川魚	○					
15.	ムツ魚	○					
16.	ギンコ魚		○	揖斐川	沼	溝	安八郡
17.	麥搗魚			長良・揖斐川			
18.	赤ムツ魚	○					
19.	川鱒			揖斐・木曾川			未流
20.	鰻魚		○		○		
21.	黄鰻魚		○		○		
22.	板鰻魚		○		○		
23.	白鱒魚	○					
24.	水龜		○		○		
25.	育鱒			木曾・長良川			
26.	麥稗鱒			長良・揖斐川			
27.	縞鱒						
28.	緋鱒					○	和知村・大名田村
29.	アジメ魚	○				○	泥中
30.	泥鱒					○	
31.	鱒魚		(大川)				下流ヨリ漸次上流ス
32.	鰻魚		○				
33.	鮑魚	○					宮川諸川
34.	嘉魚						山溪ノ深淵
35.	錢龜		○		○		
36.	田鯉	○			○	溝	
37.	鮒魚		○		○	溝	
38.	川野			揖斐川			近海ヨリ遡リ來ルノ説アリ
39.	ヌメリ魚			長良・揖斐川			
40.	鰻魚	(流水)			○	溝	
41.	緋鮒				○		郡上郡歩岐島村
42.	鮭魚			宮川			吉城郡・遡リテ來レルモノ
43.	カブ魚	○					
44.	チンチコ魚	○					石間ニ潜ミ
45.	鮎魚	○					山間溪谷
46.	鮎		○				
47.	ハゼ魚			木曾・長良川			下流
48.	鯉魚						養育・恵那郡
49.	ハツ目鰻	○					
50.	胡麻鰻	(流水)			○	溝	
51.	針魚			長良・揖斐川			加納藩城ノ外堀
52.	ビンガハゼ魚			揖斐川			
53.	落鰻						
54.	川ハゼ魚	○					
55.	ハザコ魚						武儀郡・郡上郡溪流
56.	石蟹						山谷石間溪瀾
57.	糠海老		○				
58.	蝸蠃		○		○		溪瀾池沼及溝流流水
59.	田蠃				○	水田	泥中
60.	川蟹						河邊礫砌・石籠ノ間
61.	川鰻			揖斐川	池		養老郡下池
62.	馬糞貝		○		沼	溝	泥中
63.	手長鰻			揖斐川			養老郡下池
64.	ビンガ魚	○					石間ニ潜息ス
65.	鱒	○			○		多藝郡下池
66.	金柑アジメ魚						郡上郡谷川
67.	アンコ魚						武儀郡坂ノ東村榎洞
68.	乞食ビンガ魚		○				
69.	砂クジリ魚	○					石間ニ潜ム
70.	ドンコツ						
71.	狸々ビンガ魚	○					石間ニ潜ミ
72.	蜆	○			○		泥中・砂中
73.	山鳥ビンガ						
74.	刀貝			長良川		溝	武儀郡

表8 分布状況

	記 載 名	美濃飛騨各川	美濃諸川	長良川	揖斐川	木曽川	その他
1.	鯉						恵那郡 (育養)
2.	ランチュウ魛				○		西濃
3.	櫻鱒			○	○		
4.	鱒魚			○			本巣郡
5.	将言魛魚				○		大野郡
6.	魛魚	○					
7.	柳魛魚			○	○		
8.	糞鱒魚		○	○	○		
9.	砂ホリ魚	○					
10.	カナハチ魚	○					
11.	黄鰯魚	○					
12.	鯉魚	○					
13.	白魚	○					
14.	老川魚	○					
15.	ムツ魚	○					
16.	ギンコ魚				○		安八郡
17.	麥搗魚			○	○		
18.	赤ムツ魚	○					
19.	川鱒				○	○	(末流)
20.	鱒魚	○					
21.	黄鰯魚	○					
22.	板鰯魚	○					
23.	白鰯魚	○					
25.	育鰯			○		○	
26.	麥稈鰯			○	○		
27.	縞鰯						記載なし
28.	緋鰯						加茂郡・大野郡
29.	アジメ魚	○					
30.	泥鰯	○					
31.	鱒魚	○				○	益田川、大川
32.	鰻魚	○					
33.	鮠魚						飛騨国宮川・諸川
34.	嘉魚	○					山溪
36.	田鯉	○					
37.	鮒魚		○				
38.	川鯿				○		
39.	ヌメリ魚			○	○		
40.	鰻魚	○					
41.	緋鮒						郡上郡歩岐島
42.	鮭魚						宮川 (吉城郡)
43.	カブ魚	○					
44.	チンチコ魚	○					
45.	鮠魚	○					
46.	鮎		○	○	○	○	
47.	ハゼ魚			○		○	下流
48.	鯉魚						恵那郡 (育養)
49.	八ツ目鰻	○					
50.	胡麻鰻						僅少
51.	針魚			○	○		厚見郡加納町
52.	ビンガハゼ魚				○		
53.	落鰻						記載なし
54.	川ハゼ魚	○					
64.	ビンガ魚	○					
66.	金柑アジメ魚						郡上郡・谷川
68.	乞食ビンガ	○					
69.	砂クジリ魚	○					
70.	ドンコツ						記載なし
71.	猩々ビンガ魚	○					
73.	山鳥ビンガ						記載なし

表9 美濃・飛騨主要産物の魚類

	産物名	産地	漁獲(生産)高	金額
明治9年	筏鮭	厚見	75貫	111.5円
	鮎粕漬	厚見	3,000	597.5円
	鱈腸	厚見	400壺	(鮎粕漬に含む)
明治10年	筏鮭	厚見	75貫	111.5円
	鯉	安八	1,500尾	1,000円
	鱒	羽栗		300円
明治11年	鮎	郡上・厚見・ 方県・羽栗・	45,711,500尾	3,816.72円

中に、魚類について次のような資料があった(表9)。明治初期の主要な産物の中に、今日も岐阜のお土産である「筏鮭(オイカワの佃煮・・・最初はヒガイが使われたという。明治のこの頃はヒガイだったのだろうか。)」・「鮎の粕漬」・「鱈腸(うるか)」が上げられている。鯉も主要産物に上げられている。産地が安八とあることから、野生の鯉ではなかろうか。産物としては、野生鯉から安定供給の望める養殖鯉に変わったのだろうか。

「2ランチュウ魛(カワバタモロコ)」は、「揖斐川筋及西濃地方ノ池沼等ニ棲息」とある。先にも書いたように、カワバタモロコの方言名の分布は主に養老地方にある。「うよめうわず(養老町)」・「うよめくわず(養老町)」・「きんかんもろこ(養老町)」・「ぎんはら(養老町)」・「ひか(養老町)」である。「きんばえ(関市)」だけが、養老町以外である。養老町のこれらの方言名に由来するのが、この分布であろう。余分のことだが、「うよめ」とは水鳥のカイツブリのことである。養老町には沢山の方言名がある。これらの方言名を統括する目的で、「ランチュウ魛」の名が新しく与えられたのではなかろうか。「ランチュウ魛」の名は、いろいろな文献に当たってみたが、見つけることはできなかった。

「5将言鮎魚(カワヒガイ)」は方言名由来のものであり、「しょうえもろこ(揖斐川町)」・「しょうげんもろこ(揖斐川町)」がそれである。その方言名分布は揖斐川町と狭く、記載の分布も「大野郡揖斐川筋」となっている。「3櫻鱈・・・美濃国長良川及揖斐川筋ニ生息スル」と同じ魚種であるとは、考えなかったようである。

「7柳魛魚」について、方言名「やなぎもろこ」がデメモロコの方言名として高富町から採集されている。またコウライモロコの方言名として「やなぎばえ」が八幡町から採集されている。(金古,1990a)。しかし先に記したように、この仲間はよく似ていて混同されることが多いのでスゴモロコ属としておく。

「16ギンコ魚」は、メダカであろう。鱈の稚魚であるならば、分布はもっと広いはずである。しかし、メダカは鱈の稚魚と混同されることが多く、先に書いたように

この「ギンコ魚」は、メダカだけの名前ではないかもしれない。メダカは、流の緩い池・沼や水田の間の用水路などに多く見られるという。当時の安八郡ならばそのような場所は幾らもあっただろう。

「17麥搗魚」をスゴモロコ属だとするならば、スゴモロコ属の方言名「むぎつき」の分布との関連が考えられる。方言名「むぎつき」は、先に書いたように主に長良川・木曾川筋に分布しているが、揖斐川沿いには見られない。

「19川鱈」は、川に遡上してくることからクルメサヨリで良いだろう。『長良川の生物』によれば、稀には墨俣町までさかのぼってくるようである。「揖斐川及木曾川ノ末流ニ棲息」とあるが正しい記録だろう。

「25育鱈」は、読み方も分からない。文献・方言名等を色々当たったのだが分からない。先に書いたように、「鱈魚ニ異ナルコトナシ」・「頭ハギギウ魚ニ似テ平扁ナリ」・「鱈ナク」・「脂肪多ク」・「三四寸ニ過キズ」・「稀レニ捕ふる」等より、ホトケドジョウではなかろうかと思っている。ホトケドジョウの方言名は、あるにはあるが少ない。「2ランチュウ魛」と同じく、ドジョウの太ったものという意味で「育鱈」を当てたのではなかろうかと想像している・・・?。木曾・長良川筋で稀に捕れるという。関市・各務ヶ原市の山裾に分布する湧水のある小川ならば、ホトケドジョウは今も生息している。

「26麥稗鱈」は、『本草綱目啓蒙』に「シマドヂヤウ」の一名の一つとして、「ムギワラドヂヤウ 濃州」の名で出てくる。方言名「むぎわらどじょう」の分布も広いが、ここは素直に読んで「むぎからどじょう(美濃加茂市、益田郡萩原町・下呂町・金山町、郡上郡和良村・美並村、加茂郡白川町、恵那郡加子母村、武儀郡洞戸村、岐阜市、本巣郡根尾村・糸貫町・巣南町、揖斐郡谷汲村・大野町・揖斐川町、大垣市)」とした。「27縞鱈」が、『本草綱目啓蒙』の「ムギワラドヂヤウ」と同じものか分からなかったのではなかろうか。しかし、「しまどじょう(揖斐郡池田町)」の方言名があることで書かれたのであろう。

「38川鯿」は、『長良川の生物』によると「遡上範囲としては、海津地方までが多く、下流上部墨俣町に至るとはるかに減少するが、なお少数のものは、さらに中流鏡島・長良・保戸島・小瀬などにまでもさかのぼることがあり、河口からの距離は60~70kmとなる。」とある。木曾三川全てに遡上しただろうが、揖斐川筋だけしかかかれていない。全体の記録を見ても、揖斐川が一番詳しく、次いで長良川・木曾川の順になる。調査の偏りによるのか、著者の生活場所が揖斐川に近かったことによる

ものかは分からない。だが、西濃地方に詳しいということとは言える。

「39ヌメリ魚」の分布は、先に書いたようにアブラハヤの方言名「ぬめ（山県郡高富町、本巣郡真正町・北方町・巣南町、揖斐郡揖斐川町・池田町・大野町、安八郡神戸町、不破郡関ヶ原町）と「ぬめり（美濃市美濃町、関市保戸島、本巣郡真正町）」に起因しているようだ。

「47ハゼ魚」のマハゼは、『長良川の生物』によると、「スズキ・ボラにつき遠くさかのぼる」とある。そして、「下流上部墨俣町では、大網を引くごとに、諸種の魚に混じって少数ではあるがマハゼが入って来る」とある。分布もほぼ合っているのではなかろうか。マハゼの方言名は、「うみはぜ（海津町）」・「しもふりはぜ（海津町）」が採集されている。下流と言ってよいだろう。

「51針魚」については、想定される分布と同じである。当時、加納城の外堀にも生息していたことがわかる。

「52ピングハゼ魚」の解説からアユカケとしたが、アユカケが揖斐川に多いという資料はない。しかし、『揖斐川町史』に棲息記載がある。また、2007年の調査で揖斐川の大垣市和合新町地点でアユカケが多数棲息していることを確認している。

「66金柑アジメ魚（アジメドジョウ）」は、「美濃国郡上郡谷川筋」と更に分布は狭くなる。金柑アジメ魚の名前は、婚姻色に基づくものである。この分布は、魚漁法（アジメ穴漁法）と深い関係があるのではなかろうか。アジメ穴漁法ならば、婚姻色のあるアジメドジョウばかりが獲れる。

その他、飛騨国だけに分布記載のあるものに「33鮭魚（ヤマメ）」・「42鮭魚（サケ）」がある。

## 8. おわりに

『魚類取調書』が作られた時代背景を書いておこう。

1875（明治8）年

旧来の漁業に関する権利や慣行を廃止し、申請によって、借区料の徴収を主とした新漁業制度を実施。

1876（明治9）年

7月18日 太政官達74号で海面使用は旧慣により適宜府県税を課すとした。

10月3日 湖川は海面に準ずる旨各府県に通達。（内務省達乙第116号）

1877（明治10）年

内務省間勸農局動植課に水産係設置。

1879（明治12）年

河川漁業の振興を目的として、美濃・飛騨の五大河川の環境調査。

1880（明治13）年

勸農局水産課設置。

1881（明治14）年

内務省達乙第2号漁業保護水産蕃殖を謀る件通達。

農務局水産課設置。

美濃・飛騨両国諸川の棲息魚類の調査を実施、70種の魚類の生息を確認。（『木曾三川流域誌』・建設省中部地方建設局より）・・・このときの報告書が『魚類取調書』ではなかろうか（?）。

1885（明治18）年

水産局設置。

官民ともに魚類の移殖孵化事業が盛んになる。

（注）主な資料は、『大日本水産会百年史』による。

新しい時代を迎え、殖産興業の息吹は、この資料だけからでも読み取ることができる。国としては海が中心であっただろうが、海のない岐阜県としては川魚に目を向けざるを得なかっただろう。このような新政府の殖産興業政策の中で行われたのが、「美濃・飛騨両国諸川の棲息魚類の調査」だったのである。『木曾三川流域誌』には「70種の魚類の生息を確認」とあるが、『魚類取調書』には魚類59項目・爬虫類3項目・両生類2項目・甲殻類5項目・貝類5項目の総計74項目が書かれている。70種の魚類ではないが、調査年度も合うことから「美濃・飛騨両国諸川の棲息魚類の調査」の報告書とは、『魚類取調書』のことではなかろうか。

この本を読み始めた時には、もう少し読み深めることが出来るものと思っていたのだが、大変に難しかった。方言名を駆使すればと簡単に考えていたのだが、面白いものであると同時に難しいものであることをも知ることとなった。明確な表現ではないが、分布・棲息環境についても書かれている。明治の始めのものとしては、優れた調査書といえるだろう。

## 参考文献

- 蘆田伊人 1915. 斐太後風土記 上 大日本地誌大系 7. 大日本地誌大系刊行会：423pp
- 蘆田伊人 1916. 斐太後風土記 下 大日本地誌大系10. 大日本地誌大系刊行会：347pp
- 秋道智彌 1979. 明治初期・飛騨地方における生産魚類の分布論的研究. 国立民族学博物館研究報告 4巻2号：p285-339
- 揖斐郡教育会 1924. 揖斐郡志
- 揖斐郡教育会 1993. 岐阜県揖斐郡 ふるさとの自然：196pp

- 揖斐川町 1971. 揖斐川町史. 揖斐川町: 898pp
- 上野益三 1973. 日本淡水生物学. 北隆館: 760pp
- 上野益三 1973. 日本博物学史. 平凡社: 680pp
- 内山りゅう 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川の淡水貝類. ピーシーズ: 159pp
- 小野蘭山 1991. 本草綱目啓蒙 3. 東洋文庫. 平凡社: 535pp
- 梶島孝雄 2002. 資料 日本動物史. 八坂書房: 679pp
- 可見市 2005. 可見市史 第1巻 通史編 考古・文化財: 824pp
- 金古弘之 1990 a. 続・私のまわりの魚たち. 自刊: 171pp
- 金古弘之 1990 b. 諸国産物帳(美濃飛騨)の中の魚類. 自刊: 41pp
- 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海 2001. 日本の淡水魚 3版. 山と溪谷社: 719pp
- 川那部浩哉・水野信彦 1989. 川と湖の魚①. 保育社: 198pp
- 川那部浩哉・水野信彦 1990. 川と湖の魚②. 保育社: 215pp
- 「聞き書 岐阜の食事」編集委員会(1990)
- 聞き書 岐阜の食事. 農山漁村文化協会: 366pp
- 木曾三川流域誌編集委員会 1992. 木曾三川流域誌. 建設省中部地方建設局: 985pp
- 岐阜県 1967. 岐阜県史(通史編・近代上). 1262pp
- 岐阜県健康福祉環境部自然環境森林課 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物-岐阜県レッドデータブック-. 岐阜県 352pp
- 岐阜県高等学校生物教育研究会 1974. 岐阜県の動物. 大衆書房: 403pp
- 吉城郡国府村史編纂委員会 1959. 国府村史. 吉城郡国府村役場: 1278pp
- 駒田格知 1987. 長良川の魚. 大衆書房: 92pp
- 澁澤敬三 1958. 日本魚名集覧 第一部・第二部. 角川書店: 526pp・319pp
- 澁澤敬三 1959. 日本魚名の研究. 日本常民文化研究所. 角川書店: 364pp
- 末広恭雄 1989. 魚の博物辞典. 講談社学術文庫: 606pp
- 千藤克彦 2007. 『美濃飛騨両国諸川棲息魚介図 附魚類取調書』を読んで. 郷土研究 岐阜104. 岐阜県郷土資料研究協議会: p13-15
- 大日本水産会 1982. 大日本水産会百年史. 大日本水産会: 1193pp
- 寺島良安 1987. 和漢三才図会 7. 東洋文庫. 平凡社: 458pp
- 長良川の鵜飼研究会 1994. ぎふ 長良川の鵜飼. 岐阜新聞社: 143pp
- 丹生川村史編集委員会 1998. 丹生川村史 自然編. 丹生川村: 258pp
- 丹羽彌 1957. III 長良川の魚類. 長良川の生物. 長良川の生物編集委員会 岐阜県: p190-218
- 長谷川忠崇 2001. 飛州志. 岐阜新聞社: 462pp
- 人見必大 1978. 本朝食鑑 3. 東洋文庫. 平凡社: 396pp
- 松井 魁 1971. ウナギの本. 丸の内出版: 201pp
- 宮川村誌編纂委員会 1981. 宮川村誌 通史編上: 1250pp
- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦 1963. 原色日本淡水魚類図鑑. 保育社: 259pp
- 山崎 武 1993. 四万十川漁師ものがたり 同時代社: 238pp
- 和田吉弘 1995. 木曾三川の伝統漁. 山海堂: 142pp

(附表 1-1) 記載されている種名

記載名	呼称名	和名・他	記載番号
(アイキヤウ)	あいきょう	アユ(二年もの)	46
(青貝)	あおがい	カワシンジュガイ	62
(赤ギギウ)	あかぎぎゅう	アカザ	11
(赤センバラ)	あかせんばら	ヤリタナゴ	20
(赤ネギ)	あかねぎ	アカザ	11
赤ムツ魚	あかむつ	カワムツ(繁殖期の♂)	18
(赤目)	あかめ	カワヒガイ	3
アジメ魚	あじめ	シマドジョウ・アジメドジョウ	29
(油魚)	あぶら	アブラハヤ(タカハヤを含む)	39
(油センバラ)	あぶらせんばら	アブラボテ	21
鯰魚	あまご	アマゴ	45
鮎	あゆ	アユ	46
アンコ魚	あんこ	サンショウウオ類(幼生)	67
育鱈	?	(ホトケドジョウ?)	25
石蟹	いしがに	サワガニ	56
(イシガメ)	いしがめ	イシガメ	24
(石ツボ)	いしつぼ	カワニナ	58
板鱈魚	いたせんばら	イタセンバラ	22
(イハナ)	いわな	イワナ	34
嘉魚	いわな	イワナ	34
鰻魚	うぐい	ウグイ	32
(牛魛)	うしもろこ	ウシモツゴ	2,36
鰻魚	うなぎ	ウナギ	40
(鰻)	うなぎ	ウナギ	30
(鰻鱺魚)	うなぎ	ウナギ	34
(老川)	おいかわ	オイカワ	14,23
老川魚	おいかわ	オイカワ(繁殖期の♂)	14
(落鮎)	おちあゆ	アユ(産卵期のもの)	46
落鰻	おちうなぎ	ウナギ(産卵期のもの)	53
刀貝	かたながい	トンガリササノハガイ	74
(カナクジ)	かなくじ	ガマツカ	69
カナハチ魚	かなはち	ネコギギ	10
カブ魚	かぶ	カジカ	43
(ガマハへ)	がまはえ	アブラハヤ(タカハヤを含む)	39
川鰻	かわえび	テナガエビ(♀)	61
川蟹	かわがに	モクスガニ	60
(川鯉)	かわごい	ニゴイ	32
川鱈	かわさより	クルマサヨリ	19
(川ハゼ)	かわはぜ	ウキゴリ	47,64
川ハゼ魚	かわはぜ	ウキゴリ	54
(川蜂)	かわばち	ネコギギ・アカザ	11
川鯿	かわぼら	ボラ	38
黄鱈魚	きいせんばら	アブラボテ	21
黄鰻魚	きぎゅう	ギギ科(総称)	11
(ギギウ魚)	きぎゅう	ネコギギ	25
金柑アジメ魚	きんかんあじめ	アジメドジョウ(産卵期のもの)	66
ギンコ魚	ぎんこ	メダカ・ハエの稚魚	16
糞鱈魚	くそばえ	アブラハヤ(タカハヤを含む)	8
(黒ギギウ)	くろぎぎゅう	ネコギギ	11
(黒鯉)	くろごい	コイ	13
(黒ネギ)	くろねぎ	ネコギギ	11
鯉魚	こい	コイ	48
乞食ビンガ	こじきびんが	ヌマチチブ	68
胡麻鰻	ごまうなぎ	ウナギ	50
櫻鱈	さくらばえ	カワヒガイ	3
鮭魚	さけ	サケ	42
(サンシャウウヲ)	さんしょううお	サンショウウオ類	67
(サンセウウヲ)	さんしょううお	サンショウウオ類	67
(ザス)	ざす	ネコギギ・アカザ	11
(サビアユ)	さびあゆ	アユ(産卵期のもの)	46

(注) ( )内のものは、別名および解説文中に出てきたものである。

(附表1-2) 記載されている種名

記載名	呼称名	和名・他	記載番号
蜆	しじみ	マシジミ	72
(ジネンジョ鰻)	じねんじょうなぎ	ウナギ	50
縞鱈	しまどじょう	シマドジョウ	27
将言魛魚	しょうげんもろこ	カワヒガイ	5
猩々ヒンガ魚	しょうじょうびんが	カジカ	71
(白鱈)	しらはえ	オイカワ	14.15
白鱈魚	しらはえ	オイカワ	23
鱈魚	すずき	スズキ	4
鰻	すっほん	スッポン	65
砂クジリ魚	すなくじり	カマツカ	69
砂ホリ魚	すなほり	カマツカ	9
(セカブ)	せかぶ	カジカ	43
銭龜	ぜにがめ	イシガメ(子亀)	35
鱈魚	せんばら	ヤリタナゴ	20
田鯉	たごい	ウシモツゴ	36
田鰻	たにし	マルタニシ	59
チンチコ魚	ちんちこ	ヨシノボリ類	44
(ツガニ)	ずがに	モクズガニ	60
(ツボ)	つぼ	マルタニシ	59
手長蝦	てながえび	テナガエビ(♂)	63
(鱈魚)	どじょう	ドジョウ	25.55.65
泥鱈	どじょう	ドジョウ	30
ドンコツ	どんこつ	ドンコ	70
(鯰)	なまず	ナマズ	67.68
鯰魚	なまず	ナマズ	12
蝸螺	にな	カワニナ	58
糠海老	ぬかえび	ヌマエビ	57
ヌメリ魚	ぬめり	アブラハヤ(タカハヤを含む)	39
(鱈)	はえ	ウグイ・他、若魚の総称	8.17
(鱈魚)	はえ	ウグイ・他、若魚の総称	16.23.55
(鮠)	はえ	ヤマメ	33
鮠魚	はえ	ヤマメ	33
(ハサコ)	はざこ	オオサンショウウオ	67
ハザコ魚	はざこ	オオサンショウウオ	55
ハゼ魚	はぜ	マハゼ	47
馬糞貝	まくそがい	ドブガイ	62
針魚	はりうお	ハリヨ	51
鯢鯉	ひごい	コイ	1
緋鱈	ひどじょう	ドジョウ	28
緋鮒	ひぶな	フナ	41
(ピンカ魚)	びんが	ヨシノボリ・カジカ等の底生魚	44.54
ピンガ魚	びんが	ヨシノボリ・カジカ等の底生魚	64
ピンガハゼ魚	びんがはぜ	アユカケ	52
鮒魚	ふな	フナ	37
(鮠)	ぼら	ボラ	38
鱈魚	ます	サツキマス・サクラマス	31
白魚	みごい	ニゴイ	1.13
水龜	みずがめ	イシガメ	24
麥稈鱈	むぎからどじょう	シマドジョウ	26
麥搗魚	むぎつき	スゴモロコ属	17
(麥ツキ魚)	むぎつき	スゴモロコ属	9
ムツ魚	むつ	カワムツ	15
(魛)	もろこ	タモロコ(モロコ類)	36
魛魚	もろこ	タモロコ(モロコ類)	6
ハツ目鰻	やつめうなぎ	スナヤツメ	49
(柳鱈)	やなぎばえ	カワヒガイ	3
柳魛魚	やなぎもろこ	スゴモロコ属	7
山鳥ピンガ	やまどりびんが	カジカ	73
ランチュウ魛	らんちゅうもろこ	カワバタモロコ	2
(口レコ)	ろれこ	ヨシノボリ類	44

(注) ( )内のものは、別名および解説文中に出てきたものである。

(附表2) 和名別 記載名

種 名	記 載 名	一 名 ・ 他
<b>魚類</b>		
アカザ	11. 黄鰯魚 (きぎう)	赤ギギユウ、赤ネギ、川蜂、赤鯨
アジメドジョウ	29. アジメ魚 (あじめ)、66. 金柑アジメ魚 (きんかんあじめ)	
アブラハヤ	8. 黄鱒魚 (くそばえ)、39. ヌメリ魚 (ぬめり)	ガマハへ、油魚
アブラボテ	21. 黄鱒魚 (きいせんばら)	油センバラ
アマゴ	45. 鮠魚 (あまご)	山鮠
アユ	46. 鮎 (あゆ)	アイキヤウ、落鮎、サビアユ
アユカケ	52. ビンガハゼ魚 (びんがはぜ)	
イタセンバラ	22. 板鱒魚 (いたせんばら)	
イワナ	34. 嘉魚 (いwana)	イハナ
ウキゴリ	54. 川ハゼ魚 (かわはぜ)	川ハゼ
ウグイ	32. 鰻魚 (うぐい)	
ウシモツゴ	36. 田鯉 (たごい)	牛鯰
ウナギ	40. 鰻魚 (うなぎ)、50. 胡麻鰻 (ごまうなぎ)、53. 落鰻	ジネンジョ鰻、鰻、鰻鱺魚
オイカワ	14. 老川魚 (おいかわ)、23. 白鱒魚 (しらはえ)	老川、白鱒
カジカ	43. カブ魚 (かぶ)、64. ビンガ魚 (びんが)、71. 猩々ビンガ魚 (しょうじょうびんが)、73. 山鳥ビンガ (やまどりびんが)	セカブ、ピンカ魚
カマツカ	9. 砂ホリ魚 (すなほり)、69. 砂クジリ魚 (すなくじり)	カナクジ
カワバタモロコ	2. ランチュウ魷 (らんちゅうもろこ)	
カワヒガイ	3. 櫻鱒 (さくらばえ)、5. 将言魷魚 (しょうげんもろこ)	赤目、柳鱒
カワムツ	15. ムツ魚 (むつ)、18. 赤ムツ魚 (あかむつ)	
クルメサヨリ	19. 川鱒 (かわさより)	
コイ	1. 鯽魚 (ひごい)、48. 鯉魚 (こい)	黒鯉
サクラマス	31. 鱒魚 (ます)	
サケ	42. 鮭魚 (さけ)	
サツキマス	31. 鱒魚 (ます)	
シマドジョウ	26. 麥稈鱒 (むぎからどじょう)、27. 縞鱒 (しまどじょう)	
スゴモロコ属	29. アジメ魚 (あじめ)	
スズキ	7. 柳魷魚 (やなぎもろこ)、17. 麥搗魚 (むぎつき)	麥ツキ魚
スナヤツメ	4. 鱸魚 (すずき)	
タカハヤ	49. ハツ目鰻 (やつめうなぎ)	
タモロコ	8. 黄鱒魚 (くそばえ)、39. ヌメリ魚 (ぬめり)	ガマハへ、油魚
チチブ	6. 魷魚 (もろこ)	魷
ドジョウ	68. 乞食ビンガ (こじきびんが)	
ドンコ	28. 緋鱒 (ひどじょう)、30. 泥鱒 (どじょう)	
ナマズ	70. ドンコツ (どんこつ)	
ニゴイ	12. 鯰魚 (なまず)	
	13. 白魚 (みごい)	川鯉
ネコギギ	10. カナハチ魚 (かなはち)、11. 黄鰯魚 (きぎう)	ザス、川蜂、ギギウ魚、黒ギギウ、黒ネギ
ハリヨ	51. 針魚 (はりうお)	
フナ	37. 鮒魚 (ふな)、41. 緋鮒 (ひぶな)	
(ホトケドジョウ?)	25. 育鱒	
ボラ	38. 川鯿	鯿
マハゼ	47. ハゼ魚 (はぜ)	
ヤマメ	33. 鮠魚 (はえ)	
メダカ (ハエの稚魚)	16. ギンコ魚	
ヤリタナゴ	20. 鱒魚 (せんばら)	赤センバラ
ヨシノボリ類	44. チンチコ魚 (ちんちこ)	ロレコ
<b>両生類</b>		
オオサンショウウオ	55. ハザコ魚 (はざこ)	鯢魚、ハサコ
サンショウウオ科	67. アンコ魚 (あんこ)	サンシヤウウオ、サンセウウオ
<b>爬虫類</b>		
イシガメ	24. 水龜 (みずがめ)、35. 銭龜 (ぜにがめ)	
スッポン	65. 龜 (すっぽん)	
<b>甲殻類</b>		
サワガニ	56. 石蟹 (いしがに)	
テナガエビ	61. 川蝦 (かわえび)、63. 手長蝦 (てながえび)	
ヌマエビ	57. 糠海老 (ぬかえび)	
モクズガニ	60. 川蟹 (かわがに)	
<b>貝類</b>		
カウニナ	58. 蝸蠃 (にな)	石ツボ
ドブガイ	62. 馬糞貝 (まぐそがい)	青貝
トンガリササノハガイ	74. 刀貝 (かたながい)	
マシジミ	72. 蜆 (しじみ)	
マルタニシ	59. 田蠃 (たにし)	ツボ

(附表3-1) 魚類取調書と産物帳に関係する方言名

和名	享保元文諸国産物帳(1738年頃)	両国諸川棲息魚類(1881年)	続・私のまわりの魚たち(1990)ほか
アカザ	あかざ(各務・石津) あかざす(加茂)  ざす(飛騨)  さすり(恵那) ねぎしゃ(武儀) めはち(加茂)	あかぎぎゅう  あかねぎ かわばち ぎぎゅう(美濃・飛騨) ざす	あかざ(郡上・伊自良) あかざす(ほぼ県下全域) あかねぎ(加子母・東白川・関) がばち(土岐)  ざす(神岡・萩原・下呂・小坂・東白川)  ねぎどの(板取・洞戸) めばち(多治見・土岐・瑞浪)
アジメドジョウ	あじめ(武儀・飛騨)	あじめ(美濃・飛騨) きんかんあじめ(美濃)	あじめ(ほぼ県下全域) きんかんあじめ(八幡・美濃)
アブラハヤ(タカハヤ)	あぶらめ(飛騨)   たにはえ(加茂)	あぶら  がまはえ くそばえ(美濃)	あぶら(加子母・下呂・東白川) あぶらめ(ほぼ飛騨全域・明宝)  くそばえ(郡上・金山・下呂・加茂・加子母・美濃加茂)
アブラボテ		ぬめり(美濃) あぶらせんばら きせんばら(美濃・飛騨)	ぬめり(関・美濃加茂・真正) あぶらせんばら(岐阜?) きせんばら(伊自良)
アマゴ・サツキマス	あまご(加茂・恵那・石津・飛騨)  しま(飛騨)  たなびら(恵那) ます(可児・羽栗・各務・安八・加茂・方県・飛騨)	あまご(美濃・飛騨)   ます(美濃・飛騨)	あまご(郡上・武芸川・根尾・藤橋・池田)  しま(下呂・萩原・八幡・美並・中津川・付知) たなびら(坂下・中津川) ます(八幡・根尾)
アユ	あゆ(美濃・飛騨)	あいぎょう(二年もの) あゆ(美濃) おちあゆ さびあゆ	あいぎょう(八幡・谷汲) あゆ(ほぼ県下全域) おちあゆ(ほぼ県下全域)
アユカケ		びんがはぜ(美濃)	
イタセンバラ	せんばら(美濃国内12郡)	いたせんばら(美濃・飛騨)	いたせんばら(岐阜・西濃の平野部) せんばら(大垣・真正・池田)
イワナ	いはな(飛騨) いわな(恵那) そうたけ(飛騨)  やまたけ(飛騨)	いわな(美濃・飛騨)	いわな(ほぼ県下全域) そうたけ(朝日・小坂・萩原・下呂・付知・東白川)
ウキゴリ	はぜ(安八・多芸?)	かわはぜ(美濃・飛騨)	かわはぜ(川島)
ウグイ	あかうお(可児・恵那)  うぐい(羽栗・安八・武儀・多芸・中嶋・恵那・飛騨) うぐいはえ(加茂)	うぐい(美濃・飛騨)	あかうお(金山・加茂・中津川・美濃加茂) うぐい(ほぼ県下全域)
ウシモツコ	うしもろこ(安八)	うしもろこ たごい(美濃・飛騨)	うし(羽島・墨俣) うしもろこ(岐阜・養老) たごい(関) けんかもろこ(関)
ウナギ	いもうなぎ(武儀) うなぎ(美濃)  まうなぎ(武儀)	うなぎ(美濃・飛騨) おちうなぎ  ごまうなぎ じねんじょうなぎ	うなぎ(ほぼ県下全域) おち(海津)  ごまうなぎ(白鳥・上石津)
オイカワ	おいかわ(羽栗・各務・石津・安八・加茂・武儀・中嶋) しらはえ(美濃国内12郡)	おいかわ(美濃・飛騨)  しらはえ(美濃・飛騨)	おいかわ(明智・蛭川・八百津・郡上郡上・各務原・白川・他) しらはえ(高山・ほぼ美濃地域全域)

(附表3-2) 魚類取調書と産物帳に関係する方言名

和名	享保元文諸国産物帳(1738年頃)	両国諸川棲息魚類(1881年)	続・私のまわりの魚たち(1990)ほか
カジカ	いしぶし(石津・武儀・多芸) いしぶち(方県) かじか(恵那)  かんぶつ(石津)  ちちかぶ(飛騨)  びんが(武儀・可児・加茂)	かぶ(美濃・飛騨)  しょうじょうびんが(美濃・飛騨) せかぶ  やまどりびんが	いしぶし(白鳥)  かぶ(朝日・益田・郡上) かんぶつ(上石津)  せかぶ(八幡・美並) ちちかぶ(飛騨・蛭川・付知・加子母・七宗・白川・郡上) びんが(美濃・関・岐阜・八百津) やまどりびんが(美濃・洞戸・関)
カマツカ	かなくじ(羽栗・安八・可児・恵那)  くじかな(各務・不破・厚見・方県)  すこじ(池田) すなかくし(加茂) すなくぐり(武儀) すなくじ(可児) すなくじり(石津)  すなほり(安八・不破) すなむぐり(恵那)  すりこり(石津) だんぎほう(武儀)  どうせん(可児・恵那)	かなくじ             すなくじり  すなほり(美濃・飛騨)	かなくじ(美濃加茂・関・高富・岐阜・墨俣・川嶋・養老) くじかな(美並・美濃・洞戸・武芸川・岐阜)  すなくぐり(金山・白鳥・美並) すなくじ(金山・ほぼ美濃地域全域) すなくじり(郡上・恵那郡・岐阜・藤橋) すなほり(高富) すなもぐり(中津川・福岡・蛭川・八百津)  だんぎぼ(岐阜付近) だぎんぼ(白鳥・美並・岐阜) どうぜん(東濃・八百津・御嵩・和良・金山・東白川)
カワバタモロコ カワヒガイ	あかめ(可児)    めあか(武儀) やかぶ(加茂・可児・武儀)	らんちゅうもろこ(美濃・西濃) あかめ やなぎばえ さくらばえ(美濃)  しょうげんもろこ(美濃)	あかめ(和良・高富・川島・笠松)  さくらばえ(下呂・可児・美濃加茂・美濃・関・岐阜・西濃) しょうげんもろこ(揖斐川) めあか(岐阜・墨俣) やかぶ(下呂・関・美濃加茂・岐阜)
カワムツ	あかむつ(可児)  あかもと(飛騨)  むつ(各務・石津・加茂・武儀・不破・山県・恵那) むつはえ(可児)	あかむつ(美濃・飛騨)   むつ(美濃・飛騨)	あかむつ(高山・荘川・ほぼ美濃地域全域) あかもと(上矢作・朝日・下呂・加子母・白川・白鳥・八幡) むつ(高山・国府・朝日・久々野・馬瀬・金山・美濃国) むつばえ(益田郡・恵那郡・加茂郡・郡上郡)
カワヨシノボリ	いしもち(安八) うるり(武儀) きちもち(各務) ごりん(飛騨) ちちく(加茂) ちちこ(武儀)	ちんちこ(美濃・飛騨)  びんが(美濃・飛騨)? ろれこ	うるり(武芸川・高富・伊自良・岐阜)  ごりんこ(宮)  ちちこ(郡上) ちんちこ(根尾・真正・糸貫・谷汲・大野・揖斐川・池田) びんが(八百津・高富) ろれこ(御嵩・可児・美濃加茂)
クルマサヨリ コイ	こい(羽栗・安八・加茂・不破・多芸・中嶋・可児・方県)	かわさより(美濃) くるごい こい(養殖・恵那郡)	さより(海津・羽島) くるごい(県下全域) こい(県下全域)
モツゴ サケ	やなぎもろこ(安八・中嶋)	ひごい(養殖・恵那郡) やなぎもろこ(美濃) さけ(飛騨・宮川)	ひごい(県下全域)  さけ(県下全域)
サツキマス	ます(可児・羽栗・各務・安八・加茂・方県・飛騨)	ます(美濃)	ます(八幡・根尾)

(附表3-3) 魚類取調書と産物帳に関係する方言名

和名	享保元文諸国産物帳(1738年頃)	両国諸川棲息魚類(1881年)	続・私のまわりの魚たち(1990)ほか
シマドジョウ	かなめ(中嶋・可児・多芸) たかのは(安八) むぎから(安八・中嶋・可児・本巢) むぎからどじょう(石津) むぎな(恵那) むぎわら(羽栗・武儀)	しまどじょう むぎからどじょう(美濃)	かななめ(大垣) しまどじょう(国府・池田) たかのはどじょう(岐阜・飛騨) むぎから(大垣) むぎからどじょう(清見・益田・郡上・白川・加子母・西濃) むぎな(高山・恵那郡・金山・加茂郡・郡上・美濃) むぎわらどじょう(八百津・白川・美濃加茂・関・神戸・垂井)
コクライモロコ?		むぎつく(美濃)	むぎつき(美濃加茂・加茂郡・川崎・笠松・美濃・関・岐阜・墨俣) むぎつく(岐阜)
スズキ	すずき(羽栗・安八・方県) まだか(安八)	すずき(美濃)	まだか(海津)
スナヤツメ	やつめ(武儀・飛騨)	やつめうなぎ(美濃・飛騨)	やつめ(白鳥・武芸川・岐阜・川島) やつめうなぎ(全県の)
ドジョウ	うま(中嶋) うまどじょう(羽栗・安八・本巢) じどじょう(本巢) どじょう(県内全域) ぬめり(武儀)	どじょう(美濃・飛騨) ひとじょう	うしどじょう(美濃長良川) どじょう(土岐・八百津・御嵩・本巢・池田・養老)
ドンコ		どんこつ	どんこつ(美濃加茂・関・岐阜・笠松・本巢郡・揖斐郡・大垣)
ナマズ	かねたたき(不破) なまず(ほぼ美濃全地域)	なまず(美濃・飛騨)	かねたたき(関) なまず(御嵩・美濃加茂・北方・武芸川・伊自良・上石津)
ニゴイ	にごい(方県) みごい(安八・加茂・武儀・可児)	かわごい みごい(美濃・飛騨)	かわごい(益田・加茂・可児郡・郡上・恵那郡・武儀郡・岐阜) みごい(高富) みごい(川島・関・岐阜)
ヌマチチブ	ちちぶ(安八)	こしきびんが(美濃・飛騨)	こしきびんが(関)
ネコギギ	くるざす(加茂) ざす(武儀)	かなはち(美濃・飛騨) かわばち きぎう(美濃・飛騨) きぎう くろぎぎう くろねぎ ざす	かなはち(岐阜県) きぎゆう(関) くるざす(朝日・下呂・金山・加子母・白川・美並・美濃・関) くろねぎ(加子母・東白川・白川) ざす(美並・美濃・関)
(はえ)	はえ(県内全域)	はえ	
ハリヨ	はりうお(石津)	はりうお(美濃)	はりうお(伊自良・岐阜・墨俣・真正・糸貫・北方・巢南)
フナ	こぶな(大野) ふな(美濃11郡と飛騨)	ひぶな(郡上郡) ふな(美濃)	ひぶな(郡上) ふな(岐阜県ほぼ全域)
ボラ	ぼら(安八・方県)	かわぼら(美濃・揖斐川) ぼら	かわぼら(美濃平野)
マハゼ	はぜ(安八・多芸)	はぜ(美濃)	
メダカ	あと(加茂) あとはえ(可児) うき(中嶋) うきす(羽栗・各務・安八・中嶋) うきはえ(安八)	ぎんこ(美濃・安八郡) もろこ(美濃・飛騨)	
(もろこ)	もろこ(美濃地域全域)	もろこ(美濃・飛騨)	

(附表3-4) 魚類取調書と産物帳に關係する方言名

和名	享保元文諸国産物帳(1738年頃)	両国諸川棲息魚類(1881年)	続・私のまわりの魚たち(1990)ほか
ヤマメ・サクラマス	あめます(飛騨) はえ(飛騨) ます(飛騨)	はえ(飛騨・宮川・他) ます(飛騨)	
ヤリタナゴ		あかせんばら せんばら(美濃・飛騨)	
両生類			
オオサンショウウオ	さんしょううお(飛騨)	はざこ(美濃)	はざこ(郡上・東白川・白川)
サンショウウオ類		あんこ さんしょううお	あんこ(武儀・白川・大和) さんしょいお(東白川)
爬虫類			
イシガメ	いしがめ(可児・恵那)	いしがめ	
カメ類	すっぽん(飛騨)	ぜにがめ(美濃・飛騨)	
スッポン	とうかめ(飛騨) どち(石津・安八・中嶋・羽栗・ 厚見・武儀・加茂・可児)	みずがめ(美濃・飛騨) かめ すっぽん(美濃・飛騨)	
甲殻類		いしかに(美濃・飛騨)	
サワガニ	ささかに(各務・恵那) さわかに(武儀)	すやまかに べにかに	
テナガエビ	やまかに(武儀)	かわえび(養老郡) てながえび(養老郡)	
モクスガニ	かわかに(武儀)	かわかに(美濃・飛騨) づかに	
貝類			
カラスガイ	かたながい(池田・武儀) どうびん(安八・中嶋)  まぐそがい(方県) みそがい(加茂・可児・土岐・恵那)	かたながい(武儀郡)  ばふんがい(美濃・飛騨)	かたながい(関) どうびん(南濃・川島・海津)  まぐそがい(関)
カワシンジュガイ	あおがい(飛騨)	あおがい(飛騨)	
カワニナ		いしつほ にな(美濃・飛騨)	
タニシ		たにし(美濃・飛騨)	
マシジミ		しじみ(美濃・飛騨)	